

# もど子と人婦

第拾貳卷

第一號

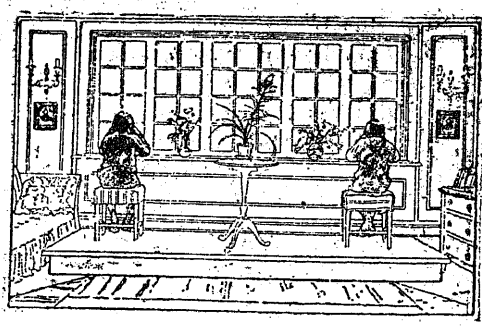


フベール會發行

第二十卷第一號目次

新らしみ	………	中川謙二郎
幼児教育者に對する希望	………	中川謙二郎
小兒畫家ラルソンの話	………	菅原教造
古き回想と新しき感想	………	野口幽香
冬季と子供の衛生	………	唐澤光徳
ほんだばらの話	………	保井コノ
森の幼稚園	………	K 生

新らしき



新らしきは外になく内にある。物になく心にある。年々歳々相同じ日の光に、けふは初日の新らしきがある。きのふも汲んだ井戸の水に、けさ若水の新らしきがある。

不斷に心の新らしきを以て、物の新らしきを感じ得るものは幸である。その目に光りの新らしきを見、その耳に音の新らしきを聞いて、其の世界は常に潑刺たる新味に充ちて居る。うひくしい子供の心は即ち此の最幸なるものである。

陳り易く、滯り易き我等の心を奮ひ起して、子供と共に常に心の新らしき人でなくてはならぬ。陳りし心ほど子供に遠きものはない。そは別の世界を見るからである。

# 幼児教育者に對する希望

會長 中 川 謙 二 郎

## 事の大小

或る二ツの問題なり、事象なりに對して、これは大きな問題であるとか、これは小さな事柄であるとかいふやうに、其の價値に輕重の差別を附けると云ふやうなことは、一般の社會によく行はれて居る事柄であります。勿論、大小と云ふことは比較上の言葉でありまして、絶對の言ではありませぬ。故に總の事柄に對して、さう云ふ差別を認め、輕重、細大に従ふて事に處すると云ふことは、云ふまでもなく大切でありますけれども、其の差別を附けるに當つては、餘程、慎重な態度で、楯の両面を見、總の方面から其の問題を觀察して、其の利害を闡明するだけの、忠實な用意を持つことが大切であらうと思ひます。

のみならず、さう云ふ相對的な差別を附ける前には、先づ二の問題の個々の價値、言ひ換れば、比較上の價値ではなくて、絶對の價値を認めてかゝることが必要であります。彼の普通屢々行はれます様に、甲のなして居る仕事と、乙のなして居る仕事とをたい一列にくらべて、甲の方の仕事は、乙よりも大きいとか偉いとか云ふやうなことは、非常に輕跳な批判法と云はなければなりません。若し、甲と乙との立場の相違なり、個人的の意味なり、社會的の意味なりを考へて見ましたならば、さう云ふ比較的價値を附けると云ふことは決して容易な業とは申されないのであります。それを、こゝ迄考へて見るだけの用意を失つて、徒らに自己の好惡なり、親疎なりの情に訴へて、其

の價值を上下すると云ふことは、決して人を尊ぶ道ではないと共に、自己を重んずる所以でもありませぬ。

然るに世には、前に申したやうな批判法が往々にして行はれて居るやうであります。吾々が日常の談話の中にも、矢張り同様な意味で、これは大事であるとか、これは些事であるとかいふやうな言葉を、無意義に使つて居ります。斯う云ふ誤つた批判の力で、物を觀ました結果、意外な間違を生じたと云ふことは、實世間の上にも往々あることとであります。

これを例へて申しますと、一身、一家に關する事柄は、最も小さなことである。言ふに足らない些事であると云ふことは、よく聞く處であります。そして、一身のことを考へ、一家のことを計ることが、非常に卑しむべきことであるかのやうに考へて居る人も少くはないやうであります。然し一

身一家のことは、それ程に小さな問題でありませうか、そんなに卑しむべき事柄でせうか、勿論一身一家を、皇室、國家、社會等に比べますと、極めて小さい、價值のないものであります。然し、それは皇室、國家、社會と云ふやうな大きな權威に對立せしめた時にだけ、さう云ふ價值の輕重が論せられるもので、其の絶對の價值に至つては、國家が大なれば、一家もまた大であると云ふことを忘れてはならないと思ひます。

更らに進めて、國家其のものに就いて考へましても、一國は即ち一身一家から成立つて居るものであります以上は、國家が大なれば、それを構成して居る一身一家もまた、決して小であるとは申されない譯であらうと思ひます。若し一身一家を輕しとするならば、これに依つて成立つて居る一國もまた輕くなる譯であります。一身一家を重んずると云ふことは、體て一國を重んじ、皇室を尊

ふ所以でなければなりません。

つまり主観と客観との相違、これが物の観方に  
大なる差違を生ずる根本の因由とすることが出来  
ます。或る一事件に對して、これを主觀的に觀た  
場合は非常に大きい事件に思はれても、これ  
を客觀した場合には、家常菴煩な些事と見れるこ  
とも往々にあることであります。此の二つの觀方  
を適度に調和すると云ふことが、最も完全に近い  
批判法と云はなければならぬと思ひます。

#### 幼稚園教育の價值

私は前に申した意味を、直ちに幼稚園教育の現  
狀に見出すのであります。幼稚園教育と云ふもの  
に對する社會一般の理解が、今の場合、どこまで  
進んで居るかと言ふことを考へて見る必要がある  
と思ふのであります。成る程、専ら幼稚園教育に  
従事されて、これを自己の使命とされて居る特志  
家だけには、其の眞價も相當に理解されて居るこ

とは事實でありますけれども、それを離れた一般  
社會や、幼兒教育家以外の教育家は、此の問題に  
どれだけの注意を拂つて居るでせうか。私が茲  
に保母諸君の自覺を呼び起し度いと申すのは、即  
ちこの點に外ならないのであります。

若し、幼稚園教育と云ふものは、吾々の生涯を  
これに投じて働くだけの價值のないものである、  
誰れにでも任せて置けばいいものであると云ふや  
うなことを考へて居る人があるとすれば、それは  
大なる誤りと申さなければなりません。

幼稚園教育を、教育上の一事業として研究致し  
ますると、どの點から考へて見ても、小さなとか、  
些細なとか云ふやうな點は、どうしても見出され  
ないのであります。若しあるとしますならば、そ  
れは子供そのものが小さいと云ふに過ぎませぬ。  
保育すべき子供が小さいからと申して、それに施  
すべき保育上の仕事そのもの迄も小であると考へ

る人は、即ち楯の両面を見ない皮相な見解と云はなければなりません。私は、兒童の大小と、教育の大小とは、寧ろ反比例を示すものであつて、子供が小さければ小さい程、その保育の困難なり、保育者が被保育者に及ぼす感化なり、従つてこれに伴ふ勞力なりの大なることを信ずるものであります。

幼稚園教育は、總の教育の根本であり、基礎であるばかりでなく、一個の人間を作り上げる上の最も大切な基礎であります。そして其の兒童は身體精神共に、弱いのでありますから、保姆の一言一行は、直ちに非常な強さを持つて、兒童の頭に印象されるものであることは云ふ迄もありません。私の保姆諸君に希望し度いと思ふ點は、こゝから出るものであります。

保姆諸君に對する希望  
即ち私が保姆たる人々に切望し度いと思ひます

ことは他ではありません。諸君が先づ幼稚園教育の偉大なる事業であることを了解して、これに對する極度の尊敬と畏懼の心を持ち、それと同時に、此の大事業に従事する自分達の偉大なることを自覺して戴かなければならぬと思ふのであります。今日の人間は、まだ進歩の足りない人であるから、誰れにしても、多少缺點のない者はないのであります。たい自ら自分を省みて、どうすれば其の缺點を少くしやうかと云ふことに意を用ふるより外はないのであります。保姆の缺點、長所は直ちに子供の頭に映じて行くのでありますから、昨日よりは今日、自己の長所が一つでも増すとしなすと、同時にそれだけ子供の長所を増して行くこと云ふことを知らなければなりません。

勿論、幼稚園教育は、家庭を離れた兒童教育の一であります。故に子供の發育の如何は、獨り幼稚園に於ける保姆の全責任であるとは申されませ

ぬ。併し、一度び委託を受けた以上は、自分の其の全責任を負ふだけの覺悟を有つ必要があると思ひます。それには、これに相當するだけの學識なり、體格なり、技能なりを有つことは勿論大切でありますけれども、それよりも、もつと大切な根本的の資格としては、先づ高潔な人格、即ち道徳上の修養を積み、智徳を磨いた人であつて、且つ益々其の修養に怠らない人であることが必要であります。

殊に幼稚園の保姆は、今の處多くは齡若い女子

## 小兒畫家ラルソンの話

### 日なたの家

今日は小兒畫家ラルソンのお話をして見たいと思ふ。ラルソンは今年六十歳で、スウェーデンに

の人々がこれに當つて居らるゝ有様でありますから、繰り返して申し上げて置き度いと思ふのは、道を修むるは、今であると云ふことであります。勿論、年老いた後には、道は修められないものだとは申しませぬけれども、然し身體發育の時機に於ける修養は、一番身につくものであります。殊に人格の修養と云ふとは、單に保姆としての資格の上にも、是非修めなければならぬ道であるとする上にも、是非修めなければならぬ道であると思ふことを忘れてはなりません。(談。文責在記者)

### 菅原教造

現存して居る大家である。ストックホルムで生れた人で、やはり其處に住んで居るけれども、春から秋にかけてスンドボルンと云ふ田舎の別荘へ



一家をあげて越して行く。そして此のステンドホルンに於ける自分の家族の生活の様を、美しい水彩畫と輕妙なエッチングとに寫生し、これにラルソン獨特の美文で説明を附して、明治三十二年から四十三年にかけて、四冊の繪本をストックホルムで出版した。この内の二冊から抜粹した繪本が三年程前に獨逸で出版された。この本は……

著者 Larson (ラルソン)

書名 Das Haus in der Sonne (日なたの家)

發行所 Karl Robert Langewiesche, Leipzig.

定價 上製一圓五十錢 並製九十錢

今日の話は、總てこの本の頁數により、總てこの本の挿畫によつて、一々細かに説明をして行くのであるから、讀者諸君は豫めこの本を御求めなされる方が御便宜である。丸善(日本橋通三丁目)や、ガイゼル、ウント、ギルベルド社(神田鍛冶町)に御注文に成れば三月ばかりで着する。

この繪本に關しての精しいことは追々御話する

として、先づ第一に讀者諸君にこの本を御求めに  
なる事を御すゝめしたい。子供のある家庭、子供  
を教へ育てる職にある方、子供に興味のある人々  
は固より云ふまでもない事であるけれども、子供  
のない家庭、子供に就いてあまり平常から御考  
へにならない方には、又尙さら御すゝめして見た  
いとも思ふ。この繪本を御取り寄せに成つて、七  
十餘の水彩畫やエッチング(エッチングとは銅版  
に臘のやうなものを引いて、其上を鐵の尖筆で畫  
をかき、これを硝酸の液にひたすと、畫いた所丈  
けが腐蝕する、この凹んだ所へインキを入れて印  
刷するものである)を御覽になれば、春の日が照  
りはえて、緑の草や美しい花が輝やいて居る國に  
遊んで居るやうな楽しい心持になる。

子供を畫いた繪もいろいろあるけれども、ラル  
ソンほど數も多く、變化のさまざまな繪を畫いた  
人はない。子供を畫いた繪もさまざまあるけれど

もラルソンの繪ほど形式と内容と、即ち書き方、線や色や光線の表はし方と、繪に書いた子供の有様とのよく調和した畫は餘り多く見受けない。

### スウェーデンと其繪畫

スウェーデンは非常に優美な國で、例を求めらば近所のデンマークよりは、むしろ却つて遠方のフランスに似て居る。デンマークの主府のコーペンハーゲンへ行つて見れば、溫良な、從順な平和な、何となく小都會的の單調な傾があるけれども、之に反してスウェーデンの主府のストックホルムへ來れば浮華、絢爛、豪華、化粧の艶麗、磨き抜いた濃かい味のある社會的生活等が見られる。デンマークと云ふ國は沈點の島にでも行つたと云ふやうな土地で、且田園生活的の國である。之に反してスウェーデンと云ふ國は大世界の幼い時代と云ふ面影があつて、この國の人はかひなくしく働き、すらくと延びた、彈力的にはづんだ

生活をして進んで行く。言語は朗々として澄んでフランスの北部らしい響がある。この國の人の性情は悉くフランスに集まつて居ると云ふ事が大なる特徴で、従つてこの國の人は藝術に於て亦北方の巴里人である。

デンマークの繪は何となく小市民的で悲哀で且つ質樸である。畫工の新しい技巧と云つても、要するに其濃やかな慎ましやかな趣味、其和らかな感覺を發表するに過ぎないので、其畫く所も古いオランダ畫工のやうに、古いソファーや、ゆるく打つ時計や、柔かい空氣や、らんぷの光の朦朧とした室を畫くに過ぎない。さうでなければ男が本を持つてテーブルに腰をかけ、子供が學校の復習をし、娘がピアノを弾じて且つ歌つて、小さい暖爐には石炭が燃えてる所などを畫くに過ぎない。極めて平凡である。

スウェーデンの繪は老熟した高貴な世間的の人

と云ふ面影がある。優美で、燃立つてるやうで、且つ精練した、官能的な、氣儘な新しい試みをつとめる實驗的なやり方をする。巴里へ研究に行つた若い畫工は、直ぐに技巧家にならうと力める。そして極めて大膽に外光の最終の問題を捕へやうと勵む。デンマーク人のやうに愛らしい優さしい所や、人を動かすやうな濃かい感情はないけれども、スウェーデン人はつまり是れと云ふ大なる特徴のない所が、やがてコスモポリタンと云ふ大きい味のある所である。つまりは精練した巴里人を通りこして、近代精神の前列に出やう出やうとする氣概が見える。スウェーデンの畫の色彩は流れるやうな撓み勝ちな魔力があり、人の神經をえぐるやうな優美な閃めきがあつて見る人の眼を奪ふ。デンマークの畫家は十九世の半頃迄、其國丈けに止まつて世界の舞臺に出なかつたけれども、スウェーデンの畫家は十八世紀に於て既に歐洲の藝

術史の一角を占めた。

現今では世界の大家として有名な人が澤山ある、中でも小兒畫家ラルソンは最有名な人である。

#### ラルソンと其作品

一八七〇年より一八八〇年（明治三年より十三年）の間に、スウェーデンの美術家は非常なる發達を遂げて、藝術上の印象を深く世人に與へた中でも、畫家であり且つ詩人であるカール、ラルソンは最も多方面の人で、且つ其畫才詩能を最も世に知られた著名な人である。彼は新しい試みを進めて飽くことを知らず、不朽な創作力を貯へて畫界の新領土を開き、今年六十歳にして尙且豊富な樂天的な作品を多く試みて居る。此の人は滑稽畫の説明者として筆をとつて最初に名を爲した人で、彼の有名な文章や滑稽畫は十九世紀のスウェーデン畫壇の最も偉大なる産物で有つた。ラルソンの畫は運動的で、快樂的で、遊びすぎで、

延びた、氣儘な、自由な才能がある。彼の書くものは悉く軽い。この製作が輕易であると云ふ事は、後年までも續いて居る彼の特長である。

今述べたやうに、ラルソンは常に新しい試みを爲し、新しい書き方の先驅者であつた。初め油繪を書き、次に水彩に移り、又バステルをも試み彫刻も出来るし、エッチングにも巧である。ラルソンがフテンスで書いた水彩畫は、なりたての果物のある小さい庭、いろ／＼な色の花、老人、蜂の巢などで有たが、追々この水彩畫でストックホルムの郊外やダラルネ地方の和かい景色、太陽の光線の照り渡つてる室内、自分の家族の樂しさうな肖像等を畫くやうに成つた。又彼のエッチングの畫き方と云ふものは、彼の機智、彼の輕妙の畫才、彼の畫の特長を語つて居るもので、讀者は私の推薦した繪本に於て、彼の水彩畫とエッチングをかなりに味ふ事が出来る。

ラルソンは近代のスウェーデン藝術家の中でも子供の心を以つて居る唯一の人である。彼は純粹のストックホルム人である。彼の藝術は彼の人物の如く快活で、輕易で、且つ陽氣で、しかも尙絢爛たる裝飾的な味はひがある。又彼の繪は清新で、若々しく、そして絶えず暖かな、にこやかな心情がこもつて居る。斯の如き感情の有りのまゝの且つ直接の表出と云ふものは、最初に述べたやうにダラネル地方ファルン市に近い、スンドボルンに於けるラルソン自身の家の家族生活、即ちスウェーデン風の木造家屋の内外の有様、及びブロード色の髪と青い眼の彼の家族の肖像や活動などを畫いた畫集四冊に十分示されて居る。この畫集をひもといて見る人は、恍惚としてラルソンのやうな人物になり、ラルソンの畫のやうな精神になり、淋しい心も、憂鬱な情も、この繪本の爲めにおのづと暖かに延びやかに開いて、善と美と喜びとに

みち溢れる。實に畫家たり詩人たるラルソンが幸福なる家庭の愛の生活を語るものはこの畫集である。

第一の畫集は明治三十二年に出た「家」と題する本で、色刷の繪が二十四枚あつて定價十三マール半(我五十錢位)

第二は明治三十五年に現はれた「ラルソンの家族」と云ふので、色刷の繪が三十二枚で十七マール。

第三は明治三十九年に發行した「我郷にて」と稱する繪本で、色刷二十四枚、十七マール。

第四は明治四十三年に出版した「日なたにて」と云ふ書で、色刷三十二枚、二十二マール。

私が推薦した抜粹でなしに、原書を御取寄せにならうと云ふ方の便宜の爲めにと四冊の名を掲げる。

2. Larsons. (Die Familie Larsons)

3. Spadarvet. (Reims auf dem Lande)

4. At Solidan. (An der Sonnenseite)

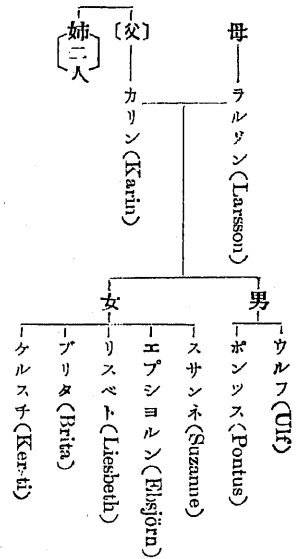
括弧に入れたのは、本の名の獨逸譯である。

右の本の發行所はStockholm市のAlbert Bonnier書店で、丸善でも、ガイゼル、ウント、ギルベルト書店でも取寄せられる。いづれもスウェーデン語で、ラルソンが美しい文章の説明をつけある。私の推薦した「日なたの家」と云ふ繪本は、抜粹とは云ひ乍ら、材料も整頓して居るし、全躰も善く纏つて居り、又複製した色刷も、翻譯した説明の文も共に心をこめたものである。今日は即ちこの本に就いて御話をする次第である。

又ラルソンの繪を繪葉書にしたものはMünchen市のG. Hirle書店發行の「Jugend-Postkarte」の中に  
ある。

これから「日なたの家」と云ふ本のページ數に從つて、ラルソンの家族の肖像、即ち家族の人々はどんな顔付きをして居るかを先づ御目にかけて、一人／＼の顔の特徴や表情の印象を心に留めて置いて頂いて、後に家族の有様を御話する時に、「ア、此の子は、あんな顔の子供で有つた」と云ふ風に、御思ひ出しを願ひたいと思ふ。

ラルソンの夫人はカリンと云つて、二人の間には、男が二人、女が五人、即ち七人の子供がある。それからラルソンには阿母さんがあり、夫人のカリンには阿父さんがある。尙カリンの阿父さんに姉さんが二人ある、しかし阿父さんも二人の姉さんも説明の文には出て居るけれども、繪には表れて居ない。この人々は次の簡單なる系圖には〔〕に入れてある。



右の表に從つて、これから一人々々説明して行く。

ラルソンは頭は禿げて、地藏眉で、眼は優しく細く、眼鏡をかけて居る。鼻は非常に高く、殊にボンチ繪にはこの鼻が大なる特徴と成つて居る。ひげは白く成つて鼻の下と顎とに延びて居る。優しい、氣輕な、輕妙な態度や性格が十分にうかゞはれる。

十六頁の右側の色刷の繪は、ラルソンがブリタを頭の上のせて立つて居る所が描いてある。黒

上衣の裏の赤いのも先子供らしくつて嬉しく、優しい眼がいと細く成つて居るのは、多分今までかけて居た眼鏡を外した爲であらうか。この室は恐らくはラルソンの畫室の一部であらう。棚の上の人形の日本出來らしいのも吾々に一入の興味を起させる。尙ラルソンの顔の特徴を滑稽畫にして示したものは、二十一頁と六十八、六十九、七十頁とに出て居る。

カリンは眼も大きく鼻も順當で口も愛らしく、一つく見れば皆それ／＼美しい形であるけれども、眼と眉とがせまつて居るのと、全體の表情が何處となしに浮かないので、眞面目過ぎた、ぎこちない、病身らしい感じを興へる。

十七頁の左側の色刷の繪は、寢室の朝（時計は八時二十五分）である。カリンは末子のケルスチを起して、着物を着せて、これから他の室へ伴れて行かうとして居る所である。尙カリンの肖像に

就いては後に精しく項を別にして述べる。カリンの顔の特徴を滑稽畫にしたものは、二十一頁、六十一頁、六十八―七十頁に出て居る。

十三頁に出て居る四人の子供の肖像を畫いた壁畫の左がウルフで右がボンツスである。ウルフの方が少しきつく、ボンツスの方は少し優いけれども、大體はよく似た兄弟である。眼も阿母さんに似てパツチリして形が良く、口も非常に愛嬌がある。鼻はウルフの方が少し丸く、ボンツスの方が寧ろ格好が良い。たゞボンツスの方が少し眉をひそめる癖がある。五十五頁のリサと云ふ馬に乗つた子供はウルフである。五十頁の木の下に立つて居る子供も恐らくはウルフであらう。四十六頁のクリスマスの朝の畫には二人とも出て居る。寢台の上に立つて居るのはボンツスである。又六十六頁の右の隅に寝て居るのもボンツスである。この二人の顔の特徴を滑稽畫にしたのは二十一頁に

示してある。左がウルフ、右がボンツスである。

スサンネは總領の娘で、小さい時は阿母さんの眼口鼻を一増美しく且つ整頓した顔で、伶俐さうな、きりつとした、牙えなくした表情を示して居る。十三頁の四人の上のがスサンネである。これと同じ顔が五頁(九頁から繰り上げて行つて)の花束を持つて居る書にも、三十七頁の糸取り車にも、三十九頁の阿母さんのお祝にも、四十五頁の活人書にも、五十三頁の天使の假装にも、六十六頁の寢室の書にも出て居る。この娘の顔の特徴を滑稽畫にしたのは、二十一頁と六十一頁(左から三番目)とにある。

スサンネが十八歳の時の肖像は三十三頁の左側の色刷の繪に出て居る。小さい時と較べるとよほどおっとりした顔に變つて來た。この繪の配色を注意して見れば優にラルソンの裝飾的の手腕を認める事が出来る。吾々に取つて快い繪である。三

十五頁の阿婆さんと子供の書の、右の方の横向き  
の肖像は、即ちスサンネの十八歳頃の顔である。

スサンネの眼をもつと細く優しくしてラルソンに似せ、口を細くしてもっと愛嬌を持たせるとエプシヨルンの顔が出来来る。五十一頁の向日葵の前に立て居るのがそれである。六十五頁の左側の色刷の繪(白樺の木の下(食事)の左から二番目の子供も、四十一頁の左側の色刷の繪(名の日の祝)の右から三番目の子供も、四十六頁のクリスマスの朝の書で人形を抱いて居る子供も皆このエプシヨルンである。

リスベトの肖像は非常に多い。頬の垂れさうに太つた、眼が丸く光つた、鼻の丸い、口を結んだ何となく恐らしい顔をした女の子である。眞面目に成つて居る顔は十三頁の四人の子供の壁畫の下の方に  
出て居る。笑つてる顔は六十二頁に、怒つてる顔は四十二頁に、寢室では五十六頁の右側の色刷



の繪に、阿母さんに體を拭いて貰つて居る所は六十  
七頁に、魚に餌をやる所は五十二頁に、其他六十  
五頁の左側の色刷の繪（白樺の木の下（食事）にも  
出て居る。この子供の顔の特徵を滑稽畫にしたの  
は、二十一頁と六十八——七十頁に畫かれてある。

五十四頁の寺院の内部の畫にある子供と、六十  
六頁の水のほとりの畫の中央にある子供とは同じ  
顔である。恐らくはリスベトが少し大きく成つた  
時の顔ではあるまいか。若しリスベトでなければ  
必ずブリタである。

ブリタの肖像は十六頁の、右側の色刷の繪で、  
父ラルソンの頭の上に腰をかけて出て居る。又三  
十二頁の右側の色刷の繪（林檎の花かげ）にも出  
て居る。尚其他四十一頁の左側の色刷の繪（名  
日の祝）の右から二番目の子もブリタである。  
板書としては、六十三頁のワッフルを食べて居る  
所、五十八頁の戸の前に立つて居る所、四十四頁

の阿母さんに抱かれて居るところ、五十三頁のね  
んねをして居る所等である。ブリタは顔の肉がむ  
ちくと肥えた、口の近處には肉の少し多過ぎる  
程な、絶えずにこくした、愛嬌のある子供であ  
る。

ケルスチは開卷第一の畫（この畫は四十七頁の  
ラルソンの畫室の上の方の左から二番目にも出て  
居る）と、十七頁の左側の色刷の繪（カリンとケ  
ルスチ）とで其面目を残りなく發揮して居る。う  
つ向き勝ちの、上眼を使ふ癖のある、口のしまつ  
た、阿母さんのカリンによく似て眼と眉の間のせ  
まつた、一種特別の表情がある。四十一頁の左側  
の色刷の繪（名日の祝）で花環を握りしめ乍ら  
さげて居る子供も、六十四頁の右側の色刷の繪  
（音階）でピアノを弾いて居る子供も、共にこの  
特徴を備へたケルスチである。

次に子供の祖母即ちラルソンの母の肖像を紹介

しやう。七頁（九頁より繰り上げて數へて）の畫は即ちさうである。この畫は四十七頁のラルソンの畫室に、カリンが腰をかけて居る處のすぐ上にかゝつて居る。三十五頁には、ラルソンの阿母さんが老年に成つた時の肖像が出て居る。

これでラルソンの家族の肖像を一々畫について精しく述べたから、次にラルソンの家のあるスンドボルンへの路案内を少し書いて見よう。

#### スンドボルンへの路案内

子供らしい、快活な、氣輕な、待遇好きなラルソンは、自分の家に客の來る事を非常に歡ぶ。スンドボルンは北緯六十一度あたりに位して居るから、我國で樺太の境界線が五十五度であるのに較べると、もつとすつと北である。この地方を總稱してダラルネ（谷即ち山と山の間の平地の意）と云ひ、名所としてはシリエン（眼の意味）と云ふ美しい湖がある。この地方へ來る汽車はファルンと

云ふ銅山で有名な人口一萬ばかりの都會で盡きるラルソンの家族を訪問する客がこの町で汽車を降りると、馬車があつて家僕のヨハンと小さいよく肥つたブラウネと云ふ犬が迎ひに出て居る。やがて客は馬車にゆられ乍ら安らかに畫工の家を指して進みつゝ、ダラルネの美しい風景を心行く限り愛でる事が出来る。スンドボルンまで行くには、たかく一時間と十五分を要すれば澤山である。客は馬車の中でヨハンと話をしながら、有名な神學者スウエーデンボルグの生れた土地や、有名な植物學者のリンネがサラモニアと結婚した處などを望むことが出来る。それから平つたい二つの岡を登つたり下つたりする。この近所の森は非常に手人がよく届いて、燕麥は規則正しく美しく生え繁つて居る。心に豫猶のある人ならば、わざ／＼馬車を降りて樹の間に腰をかけて、都會の塵に染つた眼を清めるのも興があらう。森にはやはらか

い苦がむく／＼と生えて、活きて動き出して森の花の間に踊つて居る様な感じがする。やがて道が下つて河に出る。このスンドボルン河は何となしに「御急ぎなさい、ラルソンの家では食事を調へて貴方待つて居ります」と呟やいて居るやうにも聞える。最後に車はズンドボルン橋の上をぐる／＼と轟かす。橋の下には流が音をたて、車の響に和してさゝめいて居る。河を中心とした此の土地の光景は四十九頁の左側の色刷の繪と、六十一頁の下の圖に出て居る。やがて車は古道具の山と肥料小屋の間を入つて、隣の家の庭の小さい緑の門を過ぎると、門の前にな／＼して居た雞が、はしなく晝寢の夢を破られる。馬車がラルソンの家の廻廊の前に止ると、カポーと云ふ犬は慣例に従がつて、一寸齒をむき出してうなづて見せる。固より慣例に従つたのみで、客に對して何等の悪意も反感もある筈がないから、すぐ客に脊を

見せて、友達のブラウネに御出迎へ御苦勞と挨拶をしに行く。

此處を訪問する人は誰れでも同じ様に、先づ第一に消火ポンプの入れてある戸棚の上にかゝつてある壁畫を立止つて見る。十三頁にある畫が即ちこれである。此の壁畫は、スサンネ、ウルフ、ボンツス、リスベットの四人の肖像が書いてある。そして戸の上を見ればラルソンの作つた歓迎の詩の句が書いてあるのに氣がつく。其處を入つて小さい玄關へ來ると、子供の道具がごた／＼あるので、外套かけの所在もわからない位である。然し女中のヘレナを呼べば其の始末を何とかしてもらふ事が出来る。來客はまづ此處で鏡に映つた自分の嬉しさうな顔を眺める。そして刷毛で髪の毛をなでつけ、外から汚れの付いて來た靴を清める。扱て今度は戸が三つある内の一を撰ばなければならぬ、勿論其の一と云ふのは食堂の戸である。此の

戸を開けると、戸に「神の平和」と云ふ文字がかいてある、これからいよ／＼平和の國に入るのである。室の中の戸棚には硝子戸がたつて、中に臺所道具がビカ／＼して輝いて居るのが見える。膳棚の上には壺や徳利が澤山並んで居る。其の内のどれか一には必ず客の好きな飲料が入つて居る筈である。戸棚の上にはラルソンの友人で有名な畫家のリリーフォルス、クリューゲルの畫いた皿が三枚懸つて居る。扱てカリンがテーブルに白い巾を敷くと、子供達は待遠しさうに椅子の後に立つ。ウルフは、うや／＼しく御祈をする。客が忙しい人ならば、矢張り忙しさに食事をする。家族はそれを見て満足をして居る。

### ラルソンの家の由來

十數年前、舅即ちカリンの父とラルソンと二人で、ダラルネ地方のシリエン湖の邊りに小旅行をして、其の序々に舅の故郷のスンドボルンを訪

ふことになつた。こゝには舅の所有にかゝる家があつて、年とつた舅の姉が二人住んで居た。この家は鑛滓の丘の上に建つた小さい見すばらしい家であつたのと、他の家は皆相應に大きかつたので、此の土地の人々はこの家を唯「小屋」と呼びなして別に何等の形容詞をも副詞をも添てなかつた。北國風の丸太を積んで内外に板を張つた丈夫な田舎だての家で十頁にある畫が即ちこれである。この小家の直く近くにスンドボルン河が流れて、丁度此處で曲つてこの河は一増廣くなる。家を出ると狭い急な坂があつて、これを降りると直ぐ河である。河にはボートが一艘繋いであつて、これも船つき場であるといひたさうな顔をして居る。スラリとした白樺の木が九本ばかり岡の麓に生へて居るのも嬉しく、家の中は總が小綺麗で、よく整頓して居る。節道具は古風の單純なもので、此の二人の老婦人が親から譲り受けたもので

ある。

ラルソンは此の土地に来て、四邊の光景やら、家の有様を見て、一種云ふべからざる神々しい氣高い感じに打たれて、此の大きな世界の騒ぎ、争ひ、かしましさを離れた靜寂な生活のいみじさを泌々と感じた。ラルソンは嘗つて佛蘭西の百性家に居た時に斯う云ふ感じを、たつた一度持つたことがあるのみだと云つて居る。深く動された様を見て舅は此の村で土地を買つて、家でも建つたらと云つて呉れたけれども、其の時ラルソンは斷然舅の忠告を退けて、かういふ田園の趣味と云ふものは、別に此の土地に來なくとも、自然に藝術家に備つて居るものであると云ふ意氣を示した。數年經つてから、老婦人が一人亡くなつたので殘された老婦人は到底かういふ寂しい處に、一人で住んで居ることが出來ないと云ひ出したので、舅は以前のラルソンの言葉を思ひ出して、其の家

を全部ラルソンに譲つて呉れた。感謝すべき此の贈物が、後になつてラルソンの家族に齎した幸福や恩恵を、この老人に示して悦ばせる事の出來ない中に、舅が亡くなつたと云ふことは、ラルソンに取つて盡きせぬ悲しみである。扱てラルソンは時と財力の許す限り、夏毎に建増をして室を殖やし、塀や垣根を造つて内外を修繕した。村の大工の鉤の響や槌の音を聞きながら、ラルソンは愉快に繪を畫いた。一枚の板でも一本の釘でも、一週間の分の給料でも、實は皆苦しい溜息を値したものである。斯の如くにして遂にラルソンの思ふやうな家が出來上つた。

開卷第一にある畫は、即ち落成した家である。

これを十頁の古い手入れをしない時の家と較べると非常な差である。尙この家の色を知りたい方は六十五頁と七十三頁の左側の色刷の繪を開けて御覽を願ひたい。家の内に住んで居る家族の人々が

快活であるのみならず、家の外部の色が、既に快活な陽氣な温かい賑やかな赤い色で塗つてある。即ち内から見ても外から見てもラルソンの家は實に「日なたの家」である。

次に「日なたの家」の周圍の光景を述べる。この家を横から見た所は今の七十三頁の左の色刷の繪と、六十六頁の水のほとりと云ふ畫と、五十二頁のリズベットの畫とに出て居る。この家の裏の光景は、三十二頁の左の色刷の林檎の花かげの繪と、五十頁の木の下の畫と、五十九頁の踊りの畫と、六十五頁の左の色刷の白樺の木の下の食事の繪にある。後の水に面した所は四十九頁の左の色刷の釣の繪に表はれて居る。

### 小兒室と畫室

さてこれからラルソンの畫室を見物しなければならぬ。畫室には舊と新と二つある。舊畫室即ち現在の小兒室の方が最も興味があるから、先づこ

へ入つて見る。三十七頁の畫を開くと中には數世紀を経過したやうな偉大なテーブルがあつたり、又少くとも二世紀は確かに經つたと思はれる大きな崇高な寄椅子がある。ラルソンはこの椅子に腰をかけたながら、詩集の挿畫を澤山に書いた。安樂椅子の上を見れば、高い柱がたつて居る。この柱は繪具戸棚である。其の柱の頂上にはラルソンの畫に依つて指物師が作つた人物が、腰を掛けて居る。この人物は九頁にも出て居る。戸には夫人カリンの肖像が畫いてある。

其の後暫く經つてから、衣裳室を改良して大きな新しい畫室を造ることになつた。北の光線を一杯いに受けるやうに、又中に大勢人が居ても、動きがとれるやうに場所を廣くとつた。これが出来てから此の新畫室を、たい畫室と呼ぶならして仕まつた。従つて古い方の畫室は其の役目を失つてしまつて、今では子供の仕事室になつて、ウルフ

とボンツスが槌をふるツたり、鉤をかけたたり、又  
スサンネが糸をつむいだりする。これを私は小兒  
室と呼んで置く。

この小兒室の正面の光景は三十五頁の大工と機  
織りの圖と、四十八頁の右側の色刷の繪（花に水  
をやる所）と、五十九頁の讀書の圖とに出て居る  
少し側面から見たのは二十五頁の左側の色刷の繪  
（將基）にある。三十七頁の糸をつむぐ畫は今精  
しく述べた通りである。五十一頁の畫もやはりこ  
の室である。殊に五十一頁の畫と二十五頁の將基  
の繪とを較べて、壁にかけてある額を引き合せて  
見るのも興味がある。

新しい畫室は四十七頁に出て居る。この畫室は  
恐らくは開卷第一の畫の左の二階の室であらう。  
四十七頁の畫を精しく見ると、ラルソンの書いた  
繪が澤山ならべてあるのが先づ注意をひく、今左  
側の壁から順に見て行く。第一番目の畫は恐らく

はスサンネの書いたものである。この畫にはス  
ドボルン河もあり、白樺の木もあり、ラルソンの  
家もあり、人物も居る。河が瀧のやうに上から下  
に流れて其河べりに木や家が横に成つて立つて居  
る奇觀は、後に子供の「務めと遊び」の所で説明  
するスサンネの畫と同じ趣向である。第二番目の  
畫は開卷第一の畫で、たゞ少し背景と人物との位  
置が違つて居るのみである。三番目はラルソンの  
造つた彫刻。四番目は子供が遊んで居る所、五番  
目は裝飾畫で、何となしに二十四頁の右側の色刷  
の繪（寢坊の朝飯）を思ひ出させる。

次に正面を見ると、窓の左側にやはり子供の遊  
んで居る畫がある。窓の右側にカリンの上には、ラ  
ルソンの阿母さんの肖像が掛けてある。次に右側  
の壁を見る。壁の中程の上の方にかけてある畫は  
十三頁にある四人の子供の肖像の輪廓とそつくり  
であるから、恐らくはあの畫であらう。

又三十一頁にあるカリンのこの肖像も、畫室で寫生したものである。

### ラルソン夫人カリン

ラルソンの家の敷居を跨いだ人は、幸に満ち溢れて居る彼の家族に圍まれて我を忘れて恍惚としてしまふ、どんな淋しい人でもどんな固い人でも。先づラルソンの苦心した此の家に、著しく人の目を惹き心を奪ふ魔力があると云ふ事は疑ひもない事實であるが、しかし彼の樂園のやうな生活の中心點は決してこの家丈けではない。

「神様は溢れるばかりの恵を私に賜はつた、私の妻は實に天使である」とラルソンは告白して居る。彼の夫人カリンはよく家事を治め、子供を養育して、毎日楽しい月日を送つて居る。ブリタを抱っこして居る繪は、三一頁と四四頁にある。シッコをさせて居る繪は三六頁にある。リスベットの體を拭いてやつて居る圖は六七頁にある。無邪氣

なラルソンがこの温厚な夫人に對する態度は殆んど宗教的である。北國の夏の夕べは、夢の國がこの世に出現したやうな薄光の時間が非常に長く續く。ほの暗い畫室の隅にカリンが座つて、夢を見るやうな圓い目をあげて、愛に充ちた靜な眞面目な言葉を眼を以つて言ひかはして居る——この平和なたそがれの靜けさを、言葉を以て破るのは心なき業であるから。ラルソンは清い神々しい感に打たれて、神の懷にいだかれたやうな心地になる。

子供が寢床に入り、女中も洗濯室の隣の女中室に引き下つた後で、ラルソンはカリンと食堂に残つて、楽しい時を送るのを常として居る。ラルソンは夫人に何か呼んで聞かせ、カリンは子供の着物のほころびや、切れ目をつくらひ乍ら熱心にそれを聽いて居る。一體衣裳室をラルソンの畫室に直した爲めに、食堂を衣裳室に代用して、使つて



居る。此の食堂は二た間の寢室と一列に並んで居るので、寢室の子供は時々眼を醒したり、御母さんの優さしい聲や、キスや、抱つこななどを要求したりすると、カリンはいそ／＼と立つて行く。

カリンの名の日の御祝(名の日の祝の説明は廿八頁にある)は、三十九頁の畫にある。ラルソンは御祝の詩を作り、それを女の子がうや／＼しく讀まうとする。隣の部屋では、この詩の作者が、娘の朗讀ぶりに耳をすまして居る。

夫人が嘗つて大病に罹つた事があつた。四十頁の右側の色刷の繪は恢復に向つて來て、醫者があもう大丈夫と言つた時を畫いたものである。この繪本の中でも配合の最も濼い逸品である。

### 食 事

日當り良い晴れた日には、家の後の大きな白樺の木の下で食事をする。六十五頁の右側の色刷の繪がこれである。此の木はラルソンの家族にとつ

ては、恐らく世界中で最も良い木であらう。若し此の木がなかつたなら、ラルソンの家は極めて値の少いものになつて仕まう。非常な立派な蔭を作つてくれるので、蚊や虫なども、そんなに不快な感じを起させない。この木の下の右の方に、細長い机に斜に白い布をかけて、兩側にはベンチを列べる。此方側のベンチには、子供が四人、一人丈は正面をむいて居るので、リスベトであることが知れる。後向きの二人の男の子は勿論ボンツスとウルフである。もう一人の後向きの女の子はケルスチでなければブリタである。向側のベンチには犬のカポーと總領のスサンネと、次の娘のエプシヨルンとがかけて居る。細長い机の兩端には椅子が一脚づゝ置いてある。右の端の椅子に腰をかけて居るのはカリンで、左の端の椅子にはラルソンがかける筈である。元より御馳走も極めて簡單な軽いもので、子供達は熱心に濃い牛乳を吞

み干して仕まう。カリンは快活な子供の騒ぐ有様を見て、目を輝かして芝居へ行くよりももつと愉快であると言つて居る。

廿四頁を開けば「寢坊の朝飯」の繪が現はれる。ケルスチは寢坊をしたので、外の子供はもうすっかり朝飯がすんで外で遊んで居るのに、自分丈けは獨りしよんぼりと、つまらなさうな、今にも泣き出しさうな顔をして食卓について居る。

十頁はブリタがワッフルを食べる所である。「とうちやん、わたしワッフルを食べるのよ」左の手に大事さうに大きなワッフルを持ち、右の手で襟巻を握つて、椅子に深く腰をかけた爲めに兩足ともに床を離れてぶらぶらさせて、相變らずニコニコ笑つて居る。

### 睡眠

ラルソンの家庭に於ける最も愉快な光景は、子供の寢室に於いて見ることが出来る。カリンがこ

れを芝居と比較するのも偶然ではない。ラルソンは空気の流通をよくする爲めに、平たい天上をはずし、側窓を造り、前面の壁に小さな硝子窓をこしらへ、新しい窓掛けに繪を畫いた。五十六頁の右側の色刷の繪は、日曜の朝の寢室の光景である。左の方に立つて靴下をはいて、これからシャツを着やうとして居るのはリスベトである。右の方に

もう衣裳をつけてしまつて、枕元の臺の上にあるものを取らうとして居るのはケルスチであらう。正面には奇抜な猫の繪の額が掛けてあり。床には積み木細工やら着物などが亂れて居る。

六十六頁にも寢室の有様が現はれて居る。正面の奇抜な額も、正面のガラス窓も、其の下の化粧道具も同じである。右側を見れば、スサンネが寢臺から下りて、着物を着て立つて居る。やはり右側の手前には、ボンツスが未だ寢入つて居る。左側の寢臺の上はエブシヨルンが半身丈け起して

居る。丸机の上には人形が足を投げ出してあり、中央の椅子の上には、ツボンやら、シャツやらが引かけてあり、床には玩具のお馬が立つて居る。

五十三頁の繪はブリタが草の上に轉がつて知らず／＼ネネをした處をいろ／＼寫生したものである。十七頁の左側の色刷の繪（カリンとケルスチ）も寢室である。三十九頁のカリンの名の祇の圖もやはり寢室である。四十頁の右側の色刷の繪（カリンの病氣）も同じ寢室で、其他四十六頁のクリスマスの朝と云ふ畫も同じ事である。

### 勉めと遊び

云ふまでもなくラルソンは大なる藝術家である。そして藝術と云ふ活動は大體に於いて遊戯と共通な點があると云ふことも人のよく知る所である。これ故ラルソンの家庭に於ては一家を擧げて、父のすることゝ子供のすることゝは、正しく歩調を合せて居る。畫伯のをこなひは遊びで有つて且つ

勉めである。子供の活動には勉めもあり又遊びもある。

三十五頁を開けばラルソンの古い畫室即ち今の小兒室の光景が現はれる。正面のガラス窓は窓掛を引いてあつて、一ぱいに光線が室に流れ込んで室をひたして居る。窓の中央にはボンツスカウルフか、一生懸命に板に鉋をかけて、鉋くづが台下に轉がつて居る。其右に床の上には紡ぎ車が置いてある。スサンネはもう糸を紡いでしまつたので、今窓の左の方でしきりに機を織つて居る。其後にはミシンがあり、室の左側には大工道具がならべてある。室の右の隅にはストーブに薪を澤山入れて、どん／＼燃して居る。窓越しに寒さうな外の景色が見える。

三十七頁はやはりこの小兒室の一隅の光景でスサンネが糸を紡いで居る。こゝの記述は二十頁にも出て居る。

五十九頁の畫も二人の男の子が小兒室で學校の休みの間勉強をして居る處である。この繪は今年中は本誌の第一頁の上の方に出て居ると云ふ因縁もあるから、少し解説をして見ようと思ふ。ラルンは其獨特のサラ／＼した輕快な、浮いて流れるやうな、飛びながら走るやうな線を、この畫だけには極めて規則正しく、即ち幾何學的に用ゐて、上下の比例、左右の對向等に、云ふべからざる美しい感じを持たせて居る。餘り直線ばかり續いては曲がない。それで右と左にボンツとウルフの可愛らしい後姿を見させて、しかもこれを對向に配置した。二人の形は各部分を注意すれば、皆それ／＼變つた味を含めてある。曲線はこれのみでない。左の椅子の上の蒲團の線の面白さ、殊に窓の中央を見れば、鉢植の蘭のやうな草の葉と、やはり中央の丸卓子の上に一輪指しの孔雀の尾とが重なり合つて、云ふべからざる和らかな、

しつとりと濕り氣を含んだ、なよ／＼した形を見せて居る。窓の外は空が曇りなく晴れ渡つて、鳥の歌が樂しさうに聞えて居るらしい。この麗らかな快い外の景色を前に置いて、時々鳥の羽がきを羨ましさうに見入つて居る子供は即ちウルフとボンツとである。

卅九頁には、リスベトが寢台の上か何かで畫本を見て居る畫がある。

五十四頁は子供が教會へ行つた畫が出て居る。僧侶の禿げた頭、白い鬚、疲れた頬、しまつた口、大きいしつかりした目、子供のふつくりした頬、無邪氣に半分開いた口、半は傍見をして居る顔、とり合せて面白い對照である。

六十四頁の右側の色刷の繪はケルスチがピアノを弾て居る所を描いたものである。この室は十六頁の右側の色刷の繪、即ちラルンが左の手にペンを持ちながら、ブリタを頭にのせた繪と同じ

造りであるから、恐らくは共にラルソンの新しい書室の一隅であらうと思はれる。現にこの繪にも婦人が右の手を舉げた素畫が貼つてある。

ケルスチは今や偉大なるピアノに對して、足を揃へ姿勢を正して、覺束なげにヒーフ！ミーヨ！……と音階の稽古を始めて居る。眼を一生懸命に譜に注いで居れば、動もすると手の方が御留守になる。かくして満身の注意を譜と鍵盤とに集めた眞面目なケルスチの顔こそは見ものである。

十八頁にはスサンネが書いた畫が出て居る。鼻の細長い葉巻をくはへたのはラルソンで、これと並んで居るのはカリンである、窓の左側には立木があり、其根の所には草花がある。煙出から立ち騰つた煙は中空に於いてラルソンの葉巻から出た煙と連結して居る。右の上の方には河が畫いてあつて、ボートが一艘浮いて、又水汲みのつるべが河のほとりに槓桿の仕掛に成つてさがつて居る。

其河が忽ち逆落しに成つて、ラルソンとカリンと、家と立木と草花の下を流れて、其の逆落しの中途に奇想天外とても云はふか、家と人間とが畫いてある。

六十三頁には、スサンネが椅子の上に立ち上つて、壁の上の方に何か畫を畫かうとして居る。

五十七頁の左側の色刷の繪はスサンネとケルスチとが台所に居る繪を書いたものである。正面の窓の向には光つて空と赤い屋根と黄緑の森とが朧ろにかすかに見えて、其の美しい光線が窓の上のレースや、窓側の白い鍋や其の他の器物に色の影を與へて居る。スサンネは、バターの道具を動かす、ケルスチはこれをおさへて居る。かまどの側にはハンスと云ふ猫が横向に座つて、何か熱心に動くものを見つめて居る様子が其の耳の形で知れる。

二十五頁の右側の色刷の繪は、やはりエプシヨ

ルンとケルスチとの二人が將棋をして遊んで居る所である。窓の外からは、春のほか／＼とした和らかい光線が、阿母さんの暖かい胸から出る息のやうに室の中に入つて、ガラス窓の格子や丸卓子の上や椅子のカバーや、ブラットフオームや床が美しく色どり、殊に窓わきの花や草に美しい色の影を描いて居る。

四十一頁の左側の色刷の繪は、エブシヨルンの「名の日の祝」である。名の日とは例へば、子供ケルスチャン、ネームがマリヤならば、聖母マリヤは取りも直さず其の子の名親であるから、其のマリヤの死んだ日、即ち命日に其子の「名の日の祝」をするのである。この繪は今やお祝ひをする一行が梯子を登つて、將に式場（恐らくはラルソンの畫室であらう）に入らうとする光景を描いたものである。

この繪の左の方から見て行つて、戸の入り口で

一行を迎へて居る、第一番目の人物は女中であらう。御馳走を臺にのせて運んで居る第二番目の人物も女中らしい。第三番目の父の燕尾服を引きずり、父のシルクハットの一端を冠り、胸に日向葵の花をさして、父の作つて呉れたお祝の詩を黙讀しながら、進んで行くのはボンツスである。其次に立つて、白いお祝の着物を着て、花の冠をいたいき、花束を持ち、笑を含みながらしとやかに歩を運ぶのは、當日の主人公たるエブシヨルンである。右手の上の窓から來た光線が、エブシヨルンの着物を淡青に、淡紫に、淡緑に、淡赤に色どつて居る。其の次に居る子はブリタである。扱てエブシヨルンの左に、將に梯子を登り切らうとして居るのはケルスチである。花の冠を被り、エブシヨルンの頭字を入れて造つたハート形の花環を式場でエブシヨルンに捧げやうと、しつかりと右の手で握りしめて、お得意の上目をつかひ乍ら

進んで行く。其の後に段の中程に中世式の武装をしたのは、穿く靴の割合に、膝のあたりの小さいのを見れば、恐らくはウルフであらうか。ウルフは多分餘興掛りなのであらう。其後に梯子の下で外の光と河の水の反射した光とを受けて、ヴァイオリンを弾いて居るのは、僕のヨハンであらう。ヨハンの弾くヴァイオリンの拍子に合せて、子供のはおのづとリズムをふんで動いて行く。

六十一頁を開けば人形芝居が見られる。カリンケルスチ、スアンナ、ボンツス、エブシヨルン、ブリタ、リスベトなどの似顔が窓の敷居のやうな處にならんで、右と左とには幕がある。

五十九頁は、誰か和らかい芝生の上で踊つて居て、他の人には右の方に樹や草の茂つた柵の内側に集つて見物して居る所が書いてある。家の外部は明るい光線を受けて、窓の下の草の上の丸卓子や椅子がカッキリとした形を示して居る。

四十五頁には活人畫がある。五十三頁にもスナが天使の眞似をして寝て居る妹の寢臺に腰をかけて居る。

五十八頁を見れば日の光をカン／＼受けた戸の側にブリタと、もう一人男の子とが居る。ブリタは正面を向いて居るのですぐ知れる。向うをむいて居る男の子は、鍵穴から中の様子を無邪氣に好奇心なくのぞいて居るのである。つま立てした足、ぶら下げた両手、腰のまはりの形は非常によく出来て居る。又ブリタのニコ／＼した顔は六十三頁のワッフルを食べる時の顔とはそっくりである。

七十三頁の左側の色刷の繪は冬の雪の日の遊びである。寒國の冬景色を御存じのない方には、恐らくはこの繪の面白さは十分に味はい切れまいと思はれる。綺麗な濃やかな見て居る人の心を吸ひ込むやうな感じが、この繪に溢れて、ラルソンの暖かさが雪景色の寒さを少し和らげ過ぎた位であ

る。今までどん／＼降つて居た雪が少し前に歇んだばかりで、雪は枯木の枝や何かに、ふつくりとこんもりと丸みを持つて残つて居る。煙突の煙も雪のやうに丸みを持つてむくり／＼立ち騰つて、風のない穏やかな空は未だ霽れ切らないけれども日盛りに餘り遠くない太陽は雪國の習ひに従つて輪を冠つてどん／＼として光つて居る。この太陽の黄色な淡橙の光線と、少し霽れた右の方の空から来る青い光線とが、雪の上や凍つた河の上に入り混つて漲り漂つて、華美な配合の敷物の上に薄絹を被せたやうな雪國の美しい色を地上に染なして居る。小鳥は寒さうに、赤いラルソンの家の屋根の上に騒いで、殊にラルソンが拵へてくれた巢のまはりに群つて鳴いて居る。河の上では赤味の勝つた和かい光線に包まれて、子供が四人、二人はスケートを穿き二人は襪に乗つて遊んで居る。あの二人の子供は河から登つて来る。前面に居て

襪を押して後姿を見させて居るのはケルチである。この本の開巻第一の畫は、やはり冬の日の子供の遊びを示したもので、丁度今の繪のスケルチを正面に向け直したものである。上目をする癖のあるケルチスが、阿母さんがつないでくれた手套をぶら下げて諸君の方を見つめて居る。

次は水の遊びである。四十九頁の左側の色刷の繪は女の子がラルソンの家の縁から釣をして居る所である。河を隔てた對岸の木や森や山や野原には、やうやく北國の春が立ち返つて来て、黄色い縁が輝くやうに萌えて、遙か向うには農夫が牛を使つて耕して居る様も小さく認められる。右の方には人に乗せたボートが河に浮み、左の端にはラルソンの子供の乗り捨てた二艘のボートがつかないである。

ラルソンは小舟に乗つて川をこぎまはつて子供が水を浴びる様を見たり、又朝早く子供を寢床か



ら直ぐボートに連れて来て、水を浴びさせたりする。初めは小舟を漕ぎまはつて居るけれども、後には子供を水に投げ込み、自分も共に飛び込んで泳ぐ。夏はこゝら邊りが一等の水泳場であるから子供が數多く集まつて、或は舟の兩側にしがみついて平均をとつて見たり、殊更ら平均を外づしてボートをひつくり返したりして遊んで居る。ラルソンの二艘のボートは毎日貸し切りの有様である。八月十五日には蟹が捕れる頃になるので、まるで新しい生活が始まる。ラルソンは網や罎を用意して、夜の十二時が打つとすぐに漕ぎ出して、まづ暗闇に網を下して歸つて来て、朝の五時まで寝る。五時には子供を皆起して一緒に漁に出かけて、獲物を澤山取つて漕ぎ歸つて来る頃には、太陽がそろ／＼茅の茂みから登つて来る。

六十一頁にはカリンと六人の子供とが、舟に乗って遊んで居る愉快な光景が畫いてある。ボンツス

が二挺のオールを漕げば、ウルフはへさきに立つて何かとなつて居る。エブシヨルンは舟の中の水をあかを汲み出してブリタは手を水に入れて居る。リスベトはおとなしく足をのぼし、カリンはケルチスを抱て舵をとる。鏡のやうに澄んだ河は、水禽の飛ぶ影をあざやかに寫して、對岸の森も、其の近くのボートも皆この軟かい鏡の上に映つて居る。

六十六頁はラルソンの家の裏で、河のほとりにカリンと女の子が二人と合せて三人で茶を飲みながら菓子をついて居る所である。阿母さんが何か話をして聞かせて居ると子供はおとなしく熱心に聞いて居る。外は少し風が吹く。

五十二頁には、リスベトが河のほとりに立つて河の中に小魚に餌でもやらうとして居る所である。この圖も今年中は本誌の表紙を飾る筈であるからやはり少し書いて見る。

リスベトが立つて居る草や、リスベトが見つめ

て居る水面の漣の線をよく見れば、悉く翼が生へて飛んで行きそうな勢がある。一々の線が動いて居る。一本々々が活きて居る。同じくリスベットの髪の毛も軽く自由に浮動して居る。其他木の葉にしても、家にしても、子供の衣服にしても、總じて輕妙な快活な樂天的なこの畫伯の氣質風格が悉く一々の線に表はれて、ラルソンとラルソンの畫の線とは渾然として離れ難い一體をなして居る。

この畫を本誌の一頁の上段にある二人の男の子の勉強して居る畫に較べて見て、又一入の面白さがある。前の畫は走らう飛ばう流れやうとする線を、強いて抑へて直線と直線とを組み合せて極めて平靜な落付いた形を拵へあげた、だから落付いては居るものゝ其のまゝ、軽く浮いて動いて來さうな趣がある。この畫では輕快な線の運動が自由に遡つて殊に草と水と髪の毛と木の葉に美しく

現はれて、本來の活動を思ひのまゝに發現して居る。然しこの輕妙な線で畫いてあるリスベットの顔や手付きや足取りを注意して見れば、中々頑固などつしりした落付いた表情が十分にうかゞはれる。蓋しリスベトは一家中でのしつかり者である、第一等の花形役者である。後に滑稽畫の所で精しく述べるけれども、リスベトは最も波瀾あり、光彩ある活動を爲しつゝある子供である。

子供の務めと遊びとが大體おしまひに成つたら、今度はクリスマスの記事をかゝげる。

ラルソンが明治三十二年に初めて出版した「家」と云ふ繪本を書き初めたのは丁度クリスマスの晩である。この本を書きながらラルソンは自分の子供の時の極めて單純な質朴な、しかし樂かつたクリスマスを思ひ出して、追想は遠く昔まで立ちかへる。

ラルソンの家では古い畫室即ち子供の仕事室で

クリスマススの御祝をする。九頁にはクリスマスストリーと繪の具棚の上の人形とが書いてある。ラルソンは主人役で大きい椅子に腰をかけて皆にいろ／＼な物を分ける、ストーヴには大束の長い材木がバチ／＼と燃えて、室の中央には、今朝森から拾つて来た樅の木が綺麗に組んで立て、ある。三十八頁を開けば、四十八頁の左側の色刷の繪にある様に、ラルソンが鳥に對するクリスマススの贈物として、枯木に暖かさうな枯草を澤山かけてやつた圖が出る。鳥は悦んでこの贈物のまはりに群つて来る。四十六頁はクリスマススの朝の子供の寢室の光景である。子供が朝早く――未だ夜が明け切れないので蠟燭を三本つけてある。――眼をさまましたら、昨夜サンタクロースがいろ／＼な贈物を持つて来てくれた。ブリタにはコップの中に小さい御菓子を一ぱい、ウルフにはボート、ボンツスには帽子と劍、ケルスチには繪本、エブシヨルン

には人形が置いてあつた。中にも一番遅く目を醒ましたボンツスは、シャツ一枚のまゝで、嬉しくつて着物を着る餘裕もないから、帽子を被り劍を抜いて寢臺の上に立つて居る。

七十二頁の右側の色刷の繪はクリスマススの夜の光景である。蓋しクリスマススの夜を最も幸福に過さうとする人は、善き心と善き胃とを持たなければならぬと、ラルソンは洒落を云つて居る。テーブルの前面にやらんで居る七つのコップには、一々子供の名が書いてある。例へば右から二つ目はリスベト、四つ目はスサンネのである。老人も、子供も、家僕も、ニルンベルヒの人形のやうな裝束をした女中も、ストーヴの火よりも耀いた顔をして、猫のハンスも招ばれたさうに右の手を上げて居る。

ラルソンの家庭の生活の大部分を占めて居る子供の「務めと遊び」を大體説明すれば、紹介者の

重要な任務が済んだ譯である。しかし尙詩人であり畫家であるラルソンの温かい同情で育てられたり描かれたりして、其の上ラルソンの子供の遊びのお相手となり保護者となりお友達と成つて、この家庭を一層美しく豊富にし貴からしむるものは植物と動物とである。次に簡単にこれを説明する

### 植物と動物

植物のお話をするについて、先づ第一に申さなければならぬのは向日葵の花である。屢々述べたやうにラルソンの家は太陽の家である、「日なたの家」である、そして太陽を象徴した花は向日葵の花であるから、この繪本に最も多く出て居る花はこの向日葵である。三十九頁のカリンの名の日の祝の畫にも、三十三頁の左側の色刷のスサンネの繪にも、四十一頁の左のエブシヨルンの名の日祝の繪にも、五十一頁のエブシヨルンの畫にもこの本の最後のケルスタの畫の頭にも、皆この花

が書いてある。

七頁（九頁から逆に繰り上げて數へて）を開けば、スサンネが花束を持つて居る畫がある。其の下にラルソンの詩の句がかいてある。

三十二頁の右側の色刷の繪には、ブリタが花の咲いてゐる林檎の下につかまつて、遊んで居る所が書いてある。

四十八頁の右側の色刷の繪には、エブシヨルらしい女の子が、窓わきにならべた植木に水をやつて居る様を描いて居る。明るい光が、硝子窓から溢れる程入つて、丸卓子の表面に反射して、尙更この室を輝くばかりに明るくして居る。

元來ラルソンがこの家に住んだ時には木も花もごく少なかつた。それでいろ／＼苦心して鑛洋の丘を掘つて、良い土を入れ、そして白樺だの、菩提樹だの、栗の木、楊、白ぶな、伏牛花、其他はんの木、接骨木、林檎の木、素馨、薔薇、虎耳草

莓、小さい松などを植ゑ込んだ。二十頁の圖は小松を示したもので、冬に成ると材木を組んでこの小さい木を保護して居る。只この松が枯れたのみで、外の木や草は皆よく成長した。六十五頁の左側の色刷の繪にある白樺の事は前に食事の所に記してある。五十頁にはウフルが林檎の木の下に立つて居る圖が出て居る。

五十一頁にはエブシヨルンが小兒室で向日葵を取つて來て花瓶に入れた時の様を描いてある、六十頁には花と裸に成つた子供とが書いてある。

尙この繪本に現はれた動物もいろいろある。

十五頁には鶏を追つかけまはすことの好きなカポーと云ふ犬が書いてある。六十五頁の左側の色刷の繪にはボラウネと云ふ犬が出て居る。

又五十七頁の左側の色刷の繪と、七十二頁の右側の色刷の繪にはハンスと云ふ猫が書いてある。

五十五頁にはリサと云ふ馬にウルフが乗つた繪

が出て居る。

三十頁には牛、四十七頁には羊が書いてある。

三十四頁には鶏、二十六頁には家鴨が、二十三頁には蜜蜂が書いてある。

ラルソンがこの家に住むやうになつてから、すぐ樹に箱を三つかけた。大きい白樺の木にかけた箱には、すぐ椋鳥が住んだ。二ツ目の箱にもやはり椋鳥が住んだ。三番目の箱には雀が巢を造つた又家の下には鼠と蟻とが巢を造つて居るらしいけれども、其處まではよく分らぬとラルソンも云つて居る。

三十八頁の畫と七十三頁の左側の色刷の繪とはラルソンが寒がつて居る小鳥を憐んで、枯木に温かい乾草を澤山かけて、鳥の爲めに愉快な休み場をしつらへて呉れた様を描いてある。

### 滑稽畫

最後にラルソン獨特の輕妙な洒脫な快活な、し

かも材料を自分の家族の愉快な生活に取つた滑稽書を説明して見よう。

二十一頁を開けば、カリンがラルソンの斬髪をして居る光景が現はれる。秋ももう晩くなつて、一家を舉げてスンドボルンからストックホルムへ歸らうと云ふ時、ラルソンは鑛滓の岡の上に登つて座をしめて居る。尖つた鼻、禿げた頭、ニコニコした顔。カリンの眞面目くさつた顔、鉄を持つた手つき、斬髪の姿勢。これを見て居るスサンネとボンツスとウルフとリスベトの顔やら姿やら、皆とり／＼に面白く且つ其の特長を發揮して居る。尙この四人の子供の顔を十三頁の壁畫の肖像と比較して見れば一層興味がある。

六十八、六十九、七十と三頁に互つて「そんなことをしやうものなら」と云ふ題の滑稽畫が八ツ出て居る。

ラルソンは畫室でしきりに油繪を畫いて居る。

カリンは傍でズボン下を繕ひ、ボンツスとリスベトが父と母のそばに立つて居る。

家族中の大立者たるリスベトは、父の眞似をしてこの油繪の上に指で何か畫かうと云ふのである

第一圖は繪を畫きながら、ラルソンがリスベトを叱つて居る所である。「リスベト、およし、これ油繪がまだ乾かないんだから。」

第二圖はリスベトが叱られて、すぐ手を降ろしたものの、人さし指は依然として、やはり畫かうと云ふ形を示して曲つたなりである。リスベトは怒つた顔をして畫架に後をむけて居る。ラルソンはせつせと畫いて居る。

第三圖、リスベトは隙をねらつて、又畫かうとする。ラルソンは右の手に畫筆を振りながら、リスベトを睨みつけて、「リスベト、そんな事をしやうものなら、時鳥がすぐお前をさらつて行くよ。」

第四圖、リスベトは自分の計劃を止めたもの、

畫きたくてくたまらない。人さし指をぐつと曲げて目も眉も鼻も口も、いらくさせて居る。ラルソンは續けて一生懸命に畫いて居る。

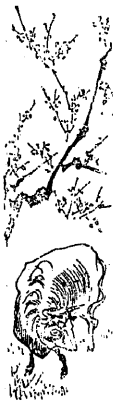
第五圖、リスベトはいよく畫かうと決心して又もや人さし指を畫布へ向ける。今度はラルソンは椅子を離れて中腰に成つて立ち乍ら「リスベトこの畫に觸らうものなら、鶴嘴で一と打ちだぞ。」第六圖、リスベトは思ひ返したけれども、留められると益々好奇心がつつて、體が慄へる程である。人さし指はだんくくと上つて來る。ラルソンは尙續けて繪を畫いて居る。

第七圖、リスベトはとうく腕をふるつて大きな曲線を書いた。かうなると誰れも眞面目に怒つたり叱つたり出來るものではない。ラルソンは畫筆も刷毛も取り落して、ひつくり返つて笑ひ出す。カリンはお腹をかへて笑ひくづれる。したりや、したり！リスベトは尙ついで軽く指を動かして居る。

て居る。

第八圖、リスベトは何をさせてもえらい。背景にはリスベトが指て曲線を引いた畫が畫架にかけて安置してある。前面にはリスベトが立つて居る。嚴肅な眼、高上りした鼻、緊縮した口、いづれもこの家族中の大人物にふさはしい。指についた油繪具がエブロンを染めて、自然に勳章を畫いて居るのも、たしかにこの小女丈夫の功績を讚して居るのであるらしい。

編者白す。菅原學士講話のラルソンの此の畫集御所望の方は本月中に倉橋宛御申込み下さい。お取り次ぎ致します。但し部數により獨逸へ注文しますので多少日時がかかるかも知れません。その點はお含み置き願ひます。



# 古き回想と新らしき感想

野 口 幽 香

また春が来ました。新年になつて御芽出度いか、嬉しいとか云ふやうなことは、私どもの齡には、もうなくなつてしまひました。けれども、さういふ意味ではなく、それと違つたいろ／＼の感想なり回想なりが浮んで参ります。去年の中に、あれを斯うしようと思ひましたことも、いろ／＼な障碍や、自分のおこたりの爲めに、そこ迄に到らなかつたことも、今年からは斯うしやうと思ふことも多く御座いますし、過ぎ去つた自分の生涯も、いろ／＼な意味で考へられて参ります。水の泡のやうに消えて行つた自分の過去を振り返ることが、これから進まなければならぬと云ふことに、どんな意味があるでせうか。人は過ぎ去つたことを振り返つて居る間は、前へは進まれないも

のだと申される人も御座いませうけれども、私は強ちさうは思ひませぬ。自分の前半生を、ちやうど晝に描いた餅に見とれて居りますやうに眺めてばかり居ましたとすれば、それは自分にも人にも何の役にも立ちますまいけれども、眞面目に自分と云ふものを考へて、これから進まうとする道に計るには、どうしても自分の過去を考へて見る必要があると思ひます。さうすることが、何等かの意味で自分を幸福にする點がキツとあると思ひます。

前に申しましたやうに、私どもの齡になつてはもう生な水々した心持ちで、新しい春の自然を謳ふと云ふやうなことは、もう出来なくなつて居りますから、せめては、斯う云ふ心掛けで、自分の



半生を振り返つて見度いと思ひます。それが人様には、どれだけ利益になるかは申されませぬが、少くとも私自分だけには、何等か意味のある事のやうに思はれるのであります。

\* \* \* 私<sup>わたくし</sup>が初めて幼稚園<sup>えうぢうえん</sup>教育<sup>けういく</sup>と云ふものに携<sup>たづな</sup>りましてから、もう二十年<sup>にん</sup>になります。二十年<sup>にん</sup>と一口<sup>くち</sup>には申しましたが、年にしますれば、随分<sup>ずぶん</sup>、久しい年月<sup>げんごつ</sup>と申さなければなりません。それも其の筈<sup>はず</sup>、小學生<sup>せうがくせい</sup>であつた子供<sup>こども</sup>が、二十年<sup>にん</sup>の間<sup>あひだ</sup>には、もう立派<sup>りつぱ</sup>な博士<sup>はかせ</sup>にも御<sup>おん</sup>なりになる年月<sup>げんごつ</sup>で御座<sup>ござ</sup>います。實際<sup>じつさい</sup>私の御世話<sup>おんせわ</sup>したお坊<sup>ぼつ</sup>ちやまが、もう今は醫科<sup>いこく</sup>大學<sup>だいがく</sup>の御世話<sup>おんせわ</sup>したお坊<sup>ぼつ</sup>ちやまが、もう今は醫科<sup>いこく</sup>大學<sup>だいがく</sup>で脈<sup>みやく</sup>をとつて居る人もあります。商業<sup>しょうぎや</sup>教育<sup>けういく</sup>に従事<sup>じゆうじ</sup>して居る人もあります。それから御役人<sup>おんやくにん</sup>や、軍服<sup>ぐんぷく</sup>の嚴めしい士官<sup>しんわん</sup>になられましたり、又、洋行<sup>やうかう</sup>なすつて居られる方々<sup>かたがた</sup>も御座<sup>ござ</sup>います。女子<sup>じよし</sup>の方々<sup>かたがた</sup>に就いて申しましたが、私の御世話<sup>おんせわ</sup>申したお嬢<sup>ぢやう</sup>さま

の御子<sup>おこ</sup>が、今また幼稚園<sup>えうぢうえん</sup>へ御入り<sup>おはい</sup>になるやうな有様<sup>さま</sup>で御座<sup>ござ</sup>います。

斯<sup>か</sup>う云ふ事實<sup>じじつ</sup>に、目の邊<sup>あた</sup>り接<sup>せつ</sup>しました時に、私自身<sup>じしん</sup>の心<sup>こころ</sup>には、どう云ふ感想<sup>かんさう</sup>が起<sup>お</sup>きて來<sup>き</sup>ますでせうか、成る程<sup>ほど</sup>、幼兒<sup>えうに</sup>教育<sup>けういく</sup>と云ふ自分の仕事<sup>しごと</sup>の上<sup>うへ</sup>から考<sup>かんが</sup>へましたならば、長い年月<sup>としつき</sup>を犠牲<sup>ぎせい</sup>にして來<sup>き</sup>ました自分の努力<sup>どりよく</sup>の、決して無駄<sup>むだ</sup>ではなかつたことが泌々<sup>しみぐ</sup>と喜<sup>よろこ</sup>ばれます。然しこれを離<sup>はな</sup>れた一個<sup>いっご</sup>の人としての自分<sup>じぶん</sup>を考<sup>かんが</sup>へて來<sup>き</sup>ますと、どんなに深く刺戟<sup>せきげき</sup>されることが多いか知<sup>し</sup>れませぬ。

幼稚園<sup>えうぢうえん</sup>教育<sup>けういく</sup>と云ふ單<sup>たん</sup>一の仕事<sup>しごと</sup>に、二十年<sup>にん</sup>の前半<sup>ぜんはん</sup>生<sup>せい</sup>を費<sup>つひ</sup>して來<sup>き</sup>ました其の間<sup>あひだ</sup>が、どんなに永<sup>なが</sup>かつたか、そして其の仕事<sup>しごと</sup>が、どんなに單調<sup>たんてう</sup>でしたか、年中<sup>ねんちゆう</sup>同じい蝶々<sup>てふてふ</sup>風車<sup>かざぐるま</sup>で過<sup>すご</sup>して、それが二十年<sup>にん</sup>も續<sup>つ</sup>いたと申す外<sup>ほか</sup>に、何の複雑<sup>ふくざう</sup>な思<sup>し</sup>ひ出<sup>いで</sup>もない貧弱<sup>ひんじやく</sup>な生涯<sup>しやうがい</sup>を考<sup>かんが</sup>へずには居<sup>を</sup>られませぬ。

斯<sup>か</sup>う云ふ感想<sup>かんさう</sup>を持つと云ふことは、自分<sup>じぶん</sup>の天職<sup>てんしやく</sup>

として居る仕事に對して、何とも申譯のないこと  
と十分承知して居ります。併し心の底には、ど  
こかさう云ふ慎みのない不安な心持ちが浮んで來  
るので御座います。それが人間と云ふもの、到ら  
ない處で御座りませうが、斯うして自分で自分  
を持て餘す事さへもあるので御座いますから、こ  
れが第三者から見ましたならば、どうで御座いま  
せう。たゞ無能と云ふ二字の外には、私に與  
へられる批評はありますまい。若し彼の人が偉い  
人だつたら、もつと大きな仕事が出来たらうに、  
あの人にもう少し力があつたら、もつと違つた  
道に行くことも出来たらうに、と云ふやうな憫み  
と冷笑との言葉がキツと私の上に、ふりかゝつ  
て來るに違ひありますまい。實際私自身にも、  
さう思ふことが多いのであります。

然しながら、前に申したやうな悔悟が、今の私

に宿つて居る心の總だとは申しませぬ。翻つて、  
これまで二十年の久しい間に、私がどう云ふ心持  
ちで幼稚園教育と云ふものに從つて來ましたか、  
こゝに思ひ到ります時に、先きに申したやうな不  
安なり悔悟なりの情が、洗ひ去られたやうに私の  
心から拭はれて行くやうな感じが致します。と申  
しますのは、幼稚園教育と云ふものは、眞に私の  
天職である。自分の全生涯をこれに捧げることが  
私の使命であるといふことが、絶えず私の胸  
に宿つて居たのであります。成る程、私のなして  
來ました仕事の結果から申しますと、極めて微細  
な、かれこれ云ふ程なものではありませぬ。私の  
やうな者が幼稚園教育の上にあつたとか、なかつ  
たとか云ふことは、何の問題にもならない程に反  
響のないものであります。それを考へます時に、  
結りは先きに申した不安なり悔悟なりが起つて參  
りますけれども、それは私の力の足りない爲め

で御座いますから、どうにも仕方が御座いませぬ  
たい、それに對する時の態度なり、心持ちなりが  
自分だけには幾分眞面目であつたと云ふことが、  
私の一いち番ばん多おほきおほきな力ちからであります。

これまでも、私に對して、何か他の職に轉じ  
てはどうかと云ふ人も御座いましたのですが、を  
こまがしいやうな言分いひぶんではあります、私には、  
むげにそれを御斷りするだけの自信があつたので  
御座います。そして學校卒業後今日まで、これに  
従したがふて參まゐりました。今後こんごも矢張やはりこの道を走あゆみ度  
いと考かんがへるのであります。これからは貧民の子供  
達を御世話するか、それとも貴族の方々を御世話  
しますか、それは判りませぬけれども、兎に角、  
幼兒教育に今後の余生を捧げやうと云ふ覺悟は、  
昔も今も一であります。

人は自分の携たづなつて居る仕事の上には、其の日其

の日だけでも自分の心に満足し得るだけの成績を  
揚げて行き度いと思ひます。然しそれが非常に困  
難な事柄ことづねとしか思はれないのであります。

私が幼稚園教育に携たづなつて來ましてから、二十  
年にもなるのですから、これには相應の経験もあ  
ると思ひます。單に其の年數の上から云ひまして  
も、決して経験がないとは申されませぬ。それだ  
けに毎日學校へ出て參りますと、其の日々のし  
なければならぬ仕事しごとが、ちやんと頭へ浮んで來  
て、手は知らず／＼に其の方へ向いて行きます。  
それから絶えず起つて來るいろ／＼の問題に對し  
ても、それ／＼臨機な處置をとるだけの用意が自  
分の頭について居ります。これは一方から申しま  
すと、熟練の結果で、これが二十年間の努力から  
得た唯一の酬せういだとも申されませう。然しまた一方  
から考へますと、これは非常に危険な習慣だと云  
はなければなりません。

何故これは危険かと申しますと、斯う云ふ習慣がつくと云ふことは、即ち頭が傳習に囚はれて居ると云ふことであります。其處から前に進まうとする研究心が失はれて行く恐れがあるからで御座います。それでなくても、女には研究心がないと云ふことは、男の方からよく云はれる事柄でありまして、私もまた、さう思ふので御座います。

幼稚園教育が他の教育に後れて居ると云ふことは、事實であらうと思ひます。その後れたと云ふのは、困難な幼稚園の教育を女ばかりに任せて置いた爲めではありますまいか、斯う申すと、少し出過ぎた言葉のやうに思はれますけれども、それが恰度自分の責任のやうに思はれるのであります。これ程永い間、此の仕事に従事して來ながら、何一つ著しい仕事をしたこともありません。自分のこれまで研究して來ました事柄に就いては、何

か一つ位の自信ある報告なり發表なりがあつてもいいと思ひますのに、それもありませぬ。

それから、幼児教育者として一番大切な、温かいやはらかな愛が私に乏しい爲めに、折角の天職として居る自分の仕事に、満足を得られないと云ふやうなことも、私の後悔の一であります。

それでは、それ程に後悔ばかりが多くて、満足のない仕事ならば、もう捨て、仕まつたらどうかと云ふ人もあるでせう。然し私には、それが出來ないのであります。私は幼児教育に對しては、もつと深い執着があります。こゝに私の心に不安が起つて參ります。私はどうして此の不安を除き去らうかと考へます時に、一番苦められますのは、自分に研究心の薄いと云ふことで御座います。

それから、私は原書は讀ませぬ。初めは原書を讀めない位で何が出來やうかと思ひまして、非

常に自分の前途を悲んで居ましたけれども、今では、さうは思ひませぬ。今日では私等の讀まなければならぬ本は、立派に日本の文字で出来上つて居るのでから、それに依つて學べば結構だと思つて居ります。嘗つて「婦人と子供」に「適當な書物」と云ふ題で、私等に利益になる本の名が掲げられてありましたが、あれだけの本を眞面目に讀むことが出来ましたならば、どんなに自分の頭が豊富になるか知れないと思ひます。

次に、雑誌で御座います。これも今少し眞面目に讀む心掛けがあり度いと自分と思ふのです。どんな雑誌を見ましても、どんな會に出ましても、これは無益だと思ふことが、これ迄に一度もなかつたことを、私だけは實驗して居ります。これまでは「婦人と子供」なども、來たまゝに封も切らない事もありましたが、此頃、よくない事だと考へまして、讀んで見ますと、なか／＼有益な記

事が多いので御座います。その中でも「机邊だより」の欄に載せられて居ります記事は、どんなに知識に飢ゑた私の心を喜ばすか知れませぬ。今では、毎月これを心待ちにして居るやうな譯で御座います。その他、専門が、つた演説會などへは努めて出るやうにし度いと思つて居ります。斯うして僅に私の進歩を助けて行き度いと思ひます。私は此の上世間から遠ざかつた、時代晩れの人となつてはならないと信じて居ります。

\* \* \*  
一方では、私自身の性格の向上、これも自分にはどれだけ多く骨を折るか知れないので御座いますけれども、なか／＼思ふやうには參らないもので御座います。それがまた非常に心苦しい事の一であります。毎日、斯うして大切な、一粒選りの子供達を預つて居まして、自分の不注意から、若しもの手落ちがあつたとしたならば、どうで御

座いませう。私は自分の預つて居る子供を、どうかして、よく愛し、よく教へ、よく導くことが出来るやうに、そして自分の天職に忠實であるやうに毎朝祈つて、漸く其の日を過して居るやうな譯で御座います。

皆様にも、私と同様な感想を御持ちになつて居られるか、どうかは知りませぬけれども、どうせ微力な私等には、表面に現はれるやうな著しい

## 冬季と子供の衛生

此の頃、小兒の強壯と云ふことが、大分はやつて來まして、成るだけ子供を平生から強壯にして置く、結び寒風に慣せたり、薄着をさせて置いたりするやうなことが、其の目的の爲めに勵行されて居るやうであります。これは吾々小兒科から云

仕事は、さう易く出来るものではありません。たゞ自分の行くべき道を考へ、自分を守つて、其の仕事に忠實な心掛けを持つことが、私等には一番大きな仕事と考へるのであります。

これが私の取り留めのない懺悔で御座います。何か御話しせよと云ふことでしたが、別に大した考へもありませんので、これを申上げた譯で御座います。(文責在記者)

醫學士 唐 澤 光 徳

ひますと、大分其の濫用があつて、其の爲めに反つて悪い弊害を醸して居るやうな點がないとは云へないのであります。其の重なる二三を申して見ますと。

### 第一 冷水摩擦法と冷水浴

であります。これは此頃餘程盛んに行はれて居るやうに見受けます。これは子供の皮膚を強くして寒風に堪え、寒胃にかゝらないと云ふ風な意味から、一般に行はれるのでせうが、然し大人乃至大きい強壯な子供には、これ等のことを習慣性にして置くのは、或は體を強壯にさせるかも知れませぬが。小さい子供には餘程考へものであります。先づ私等の經驗から見しても、さう云ふ風な小さな子供に冷水摩擦を行つて居らるゝ家庭と、さうでない家庭との子供を比較して見ますのに、寒胃にかゝる度合が別に變りさうにもないのであります。のみならず、時に依ると不完全な家屋の中で寒風にあひながら體を拭うやうなことがある爲めに、風を引き易いやうな傾があるのです。なほ又、子供の厭がるのを無理に勵行する爲めに、子供の精神状態が悪くなると云ふやうな報告もある位であります。少くとも満七歳以内の子供に、

此の方法を勵行すると云ふことは、餘程考へものであらうと思はれます。

## 第二 寒風に慣らすと云ふこと

これも一種の流行となつて居ります。家にばかり居て、暖い空氣の中ばかり育つて居て、たまに外に出ると、直ぐに風を引くと云ふやうな考へから、どんな子供も、どんな健康状態にある子供でもかまはず、寒い時も、風の吹く日も、成るだけ戸外に出して、寒い風に觸れさせる、寒い空氣に慣れさせると云ふ方法をとつて居らるゝ家庭も大分見受けられるのですが、これも考へもので、子供が極く強壯な體ならば、風のない暖かな日に外の空氣に觸れさせるのも害はないでせうが、小さい哺乳兒を、これから先き北風の寒い、乾燥した處に出して、態々吹き晒らされると云ふことは、一面からは成る程、寒風にならさせる利益があるかも知れませぬが、一面から見ますと、立派に寒

胃や氣管支加多留を起させる動機になるのであります。これが爲めに弱い哺乳兒になりますと、將來、強壯になる習慣が得らるゝ處か、重い氣管支加多留等に罹つて、忽ち天國へ上るやうなことがないとも云へませぬ。

### 第三 薄着の習慣

前に申したごとく、同じ關係は、例の薄着であります。子供を餘り大事にし過ぎて、厚着をさせるから、小さい子供の皮膚が弱くなる。厚着の爲めに汗をかきますから、直ぐに風を引き易いなど、云ふ風に考へて、成るだけ小兒は薄着をさせなければならぬと云やうな考へも行はれて居ります、これも子供の年齢に依ることと、どんな子供に對しても一様に有効であるとは申されないものであります。も早や満五歳以上にもなつて、風を引いても、氣管支加多留になつても、命に關係がないやうな年頃になつてからでしたら、或は薄着も強壯

の習慣をつける爲めにはいいことかも知れませぬが、これより以下の年齢、殊に哺乳兒などの時機には、日本の家屋が空氣の流通がいい爲め、言ひ換へると、障子からも風がよく入るし、疊の透間からも風がよく入る爲めに、室内の温度の差が、晝夜餘り劇しいやうな處では、容易に氣管支加多留を起し易い恐れがあります。

吾々の方から申しますと、少くとも哺乳兒時代、及びこれに近い小さな子供には、薄着よりは厚着ぞんざいに思ひ切つたことをするよりは、叮嚀に取り扱ふて置く方が、命に關する危険が少ないやうであります。詰り哺乳兒乃至小さな子供を北風に吹き晒したり、水を浴びさせたり。薄着をさせたりするやうなし方は、所謂獅子の子を谷へ落とすやうなし方があります。さう云ふ昔のスパルタ流のやり方は、國家全體の上から申せば、弱い子供はズン／＼これに堪えないで死んでしまい、強壯な子



供ばかりが後に残ることになりますから、至極結構かも知れませぬが、一軒の家族から考へて見ま

## ほんだはらの話

したならば、どんなに不幸なことか知れないのであります。(談、文責在記者)

保 井 コ ノ

一月のお飾りの一つとしてある「ほんだはら」について私は少し書きたいと思ひます。

「ほんだはら」は、日本の沿海到る所として其種類を産せない所のない海藻であります。我國では古くから、知られて居たもので、此種類に造詣の深い理學博士遠藤吉三郎氏は我古語にある「なりのそのはな」(莫語花)を此藻類の名稱であると申されて居ります。

藻の類は三大部に分たれて居りまして是等は、各其色を異にして居りますから、それによつて、紅藻類、褐藻類、綠藻類と唱へられて居ります。

「ほんだはら」の類は此内の褐藻類に屬するものでありまして、海岸で海水の漸く達する位の場所から餘り深くない海中に生へて居ります。

元旦の飾りに用ふる「ほんだはら」は、乾かしたものでありまして海中にある時は褐色を致して居ります。是は此植物の細胞の中に褐藻素と申す色素を持つて居りまして、普通の植物の葉の細胞内にあるのと等しい葉緑素の持つて居る色を隠して居る爲であります。乾いたものでは褐色素が薄くなる爲に綠色を顯はして參ります。

此植物は其體の最下端は圓盤の形をして海中の

岩などに附着して居ります。是を普通に根と唱へますが、花を持つて居る植物の根の様にはから養分を吸収する様な事は致しません、只體を一定の場處に固着して置くに止まるのであります。

莖は大層よぢれて居りまして其切り口は四角形或は三角形を致して居ります。此莖から枝を澤山に出しまして二年或は三年で全成長を終へます。葉は御存じの通りに其縁には切れ込みがありまして其葉の柄の上側に短かき枝を生じて是に小さな球の様なものを付けて居ります。此球は氣胞と唱へ中空になつて居りまして生きて居る時には其中に一種の瓦斯を含んで居る爲に體は海水中に浮かぶ事の出来るのであります。上部の枝の切口は莖と違つて略圓形をして居りまして葉も小さく軟かでありまして是を汁の實或は酢につけて食用に致します。此枝には前に申した通りに氣胞がありますから食用にしますと、ぶつくと音がする

爲に昔の人が「ななりそ」といつたのから「なのりそ」と轉化して來たのであると古人は此名を解釋せられた事があります。

凡て此様に莖葉等と申すけれども、是等は花を持つて居る他の植物と違つて、是等の植物にいふ意味での葉莖等とは意味は全く違つて居るのであります。そして是等のものは其植物の全體の表面から海水中にある養分を吸ひまして是を其滋養分とするのであります。

「ほんだはら」類では其植物が充分に成長しますと或株では枝の一部分に、雄器托と申すものが出來或株では雌器托と申すものが出來ます。此雄器托にて雄器が出來此中に無数の精蟲と唱へて肉眼では見えない程の小さな體が出來是は二本の纖毛を持つて居て熟しますと雄器より出て海水中を遊いて歩きます。そして雌器托には雌器が出來まして此内には一個の卵が出來ます。是は精蟲と比

較すると非常に大きくて肉眼で見得る位それが雌器から出て雌器托の周圍に附着して居ります。こへ前の精蟲が来て卵といふものとなり、是が海底に落ちてまたものと植物となるのでありますから花などは持つて居ないのであります。

「ほんだはら」の類はまた總稱を「もく」といはれまして是にいろいろの形容詞がついて「あかもく」「よれもく」の「こぎりもく」「いそもく」等と澤山にあります。それから「なのりそ」から轉じて「莫騎」となり再轉して神馬は祟る故に騎る勿れとの意味より「神馬藻」と漢字をあつるに至り、今日尙出雲越後地方に於ては「じんばさう」又「じんめさう」を以て呼ぶと申す事でありませす。

「ほんだはら」は、穂俵といふ意味からして、正月の飾りに用ゐらるものであります。此外には食用にもなります肥料ともあります。しかし其効用は此點に於ては余り大きいものとは申されませ

ぬ。滋養の價値などは殆どないと申して差支なからうと存じます。が併し此類の植物は我國の沿海に澤山の密林をして居りまして淺海に棲む魚介に對して棲息の場處を與へまた海洋に棲む魚族の爲には放卵の場處を與へるのであります。平常に太平洋に棲む魚族も其産卵期に至ると群をなし列をたて、淺海に來り茲にて藻類の多量に繁殖する所を撰んで産卵するのであります。此藻類は重に褐藻類であつて「ほんだはら」類は昆布類に亞いで此點に貢獻の多い藻類なのでありますから、直接の効用即ち食料とか肥料とかになる事は少くとも充分に保護の道を講ずる必要のあるものであります。

「ほんだはら」類に近い緣故のある海藻で我々の食用とするものには「ひじき」があります。随分廣く食用とせらるるものではありますけれども滋養分として、價値はないものであります。又凡て褐藻類には沃土を含む事が多く殊に昆布、あらめ、

はじめの如きものには比較的多量の沃土をもつて居るから是より沃土を製造する事が我國でも随分盛んでありますから是等のものに近い「ほんだはら」類も沃土製造の原料としては如何と考へられますけれども是は有望でなく其含量は到底工業上

## 森の幼稚園

(一)

S K 生

收支のつぐのはれるものでないさうであります。是に反して歐州では此科のあるもの即我國の「ひもつのまた」に近いものからは醋酸を製すると申します。(完)

### 一、森の先生

先生が此の幼稚園を開かれてから、もう大分の歳月になります。入口の檜の木を門に利用して、小さな標札が懸けてあるけれども、近所では幼稚園の名をいふ人はありません。森の幼稚園で通つて居ます。同様に先生の名をいふ人もありません。森の先生で通つて居ます。

如何にも通稱の示す通り、森の先生に相違ない

のです。皆さんが△△△の停車場で電車を降りて南へとつて二三丁行かれると、もう此の森の頭が見えます。以前は何の土地であつたのか、廣い廣い森と、それに連る起伏多い畑地とが、此の幼稚園の敷地なのです。此の廣い敷地の中に、日當りのよい洋風の平屋建と、藁ぶきの家が三軒あります。洋風の方が幼稚園で、藁ぶきの中で比較的大いのが先生の住宅です。先生は此の質素な家に、

奥さんと、末のお嬢さんと、忠實な僕婢等とで、極めて平和な生活をして、専心幼稚園の爲に盡して居られます。

先生は總ての場合、總ての人に、心からなつかしがるゝ方です。前に大學で教育學の講義をして居られた頃には、丁度彼のウインツブルグ大學のメランヒトン教授の様に、學識に於ても人格に於ても、多くの若い學生の崇拜の中心でありました。その有名な大先生が、郊外へ引込んで幼稚園などを始められるといふのですから、當時は社會から随分意外なことに思はれたのでした。併し先生は幼児教育を決して低い仕事とも容易い仕事とも考へて居られませんでした。従つて、御自身この幼稚園を初められることを何等奇なこととも思つて居られませんでした。さうして今では、嘗て大學生から敬慕せられたと同じ様に、可愛い幼児達の親しみと、なつかしみとの中心になつて

居られます。

幼児達は毎朝幼稚園へ來ると直ぐに、先生の顔を見なければ承知しません。可愛い聲で先生先生と言つて、馳けて來ては取りすがります。先生が簡単な背廣服を着て、幼児達と鬼ごつこやまゝ、ごとをされて居る時には、此の大先生と幼児達とが、全く互に溶けあつて仕舞つて居ます。それから又風の温い午後など、先生が幼児達を連れて、近所の八幡様へでも行かれようといふ時には、先生の身邊は二重三重と幼児達に取り圍まれて、それはく大層な騒ぎです。

先生はまた、此の幼稚園の全職員の心服の中心であります。素より多勢の人数でもありませんがその一人々々が、残らず先生に敬愛の念を傾倒して居ます。單に園長、職員といった様な、形式的關係だけのものは一人もありません。皆、何かの點で先生を慕つて來た人、また先生の方でも信任

して居る人ばかりです。私はいつでも、イヴェルダンの學校に於ける、ペスタロッチと其の弟子でもあり協力者でもある職員達との關係を思ひ出すのであります。

そればかりでなく、先生は亦、此の幼稚園を中心にした附近の人々からも敬慕されて居られます。此の幼稚園が初めて出来た時は、附近の人々は其の餘り簡単な開園式に呆れた位でした。國旗が一本園庭の旗竿に掲げられた丈で何の裝飾も、目を引く趣向もなかつたのでした。さういふ風でしたから、近所でも幼稚園が出来たのかどうか、随分の間知らない人もあつた程でした。それが二年たち三年たち、今では自分の子供を通園させて居ると否とに拘はらず、近所で先生を敬慕しない人は一人もない様になりました。先生が村の爲に盡さるゝいろいろのことは後でまたお話しする積りですが、さういふ事の外に、随分小さな、つまらな

い様のことまで、森の先生々々といつては相談の中心になつて居られます。

斯うして、總てのものから敬慕され、また總てのものを親愛して居らるゝ中にも、最多く先生の頭と胸とを占領して居るものが、森の幼稚園であることは言ふ迄ありません。先生の高遠なる學殖と、崇高なる人格とが、世に最も小さい幼兒達の爲に、何の惜しげもなく傾注されて居るのです。

## 二、ガーデン主義

暖い午後。

先生といつしよに、フロックスの移植をして居ると、時々鶏小屋の方で頓狂なブエマの聲が聞えるのと、かすかに電車の響が聞える外は、何の響もありません。幼兒の歸つた後の幼稚園の、一としきりゆつたりとした静かさが、ほか／＼とした日向に充ちて居ります。

「ねえ君、温室の様に無理強ひに咲かすのでもな

いし、と言つて勿論、野原の様に野生のまゝ放任して置くのでもなし、自然に生長して、自然に咲くべきものに、適當な培養を與へるのが目的でしょう。――つまり幼稚園は幼稚園なんだねえ」

いつでもこのことですが、幼稚園の園といふ字が先生にとつては如何にも含蓄の多い、意味の深いことなのです。幼児教育の目的なり方法なり、さういふお話を伺つて居ると、つまり幼稚園は幼稚園だねえ」といふ句が屢々出ます。それも決して口癖と名づくべきものではなくて、假りに數千萬言を以てしても、此の一語ほどに我が事業をいひあらはす語はないといふ強い心持が、其の度毎にお顔にありくと讀めるのです。

私はいつでもさう思ひます。

フレーベルが幼児教育の計畫すでに熟して、たゞ適當な名稱の無いのに困つて居た時のことでした。二人の親友と、ブランケンブルグへの途すが

ら、いつもの様に、あれかこれかと名稱の選擇に苦心して居ました。丁度スタイゲルの峠路へさしかつて、ブランケンブルグの町を脚下に見て、愈々考へまどうて居た時です。急にフレーベルは立ち止まりました。今迄うなだれて居た其の目には異様の喜びが輝きました。さうして山を仰いで叫びました。

「これだ、これだ、幼稚園だ」

と。さうしたら四方の天が之れに應へて反響したと其の時の友人が後に書いて居ます。實に、私共が常に言ひ慣れ、聞き慣れて居る「幼稚園」といふ名は、こうも潑刺たる感動を以て考へ出されたのです。それが後には段々とうすらいで、終には何の感動もなく凡化して仕舞つて居るのです。先生はつまり此の百餘年前の古い感動を、絶えず新らしく胸に湛えて居られる人だと、私はいつでもさう思ひます。

殊に私にとつては、先生の此の語が、他の人よりも一層よく分るかと思ふのです。私は斯うやつて先生と土いぢりを始めると、必ずあの時のことを思ひ出します、私が初めて此の幼稚園へ先生をお訪ねした時でした。いろいろのお話の中に、植物培養の要訣は約て言へばどういふ點にあるかといふ様な問が出ました。私は何の氣もなく、「さうですなあ、いは自然の手傳ひです」と答へました。すると先生は急に其の大きな手で私の肩を抱くやうにして、

「さうです」

と言はれました。それは只一言でしたけれども、何だか私の心全體に響く様に思はれました。暫くして、先生は其のやさしい目で、にこやかに私を見て

「吾々のして居る仕事も矢張り同じです」  
と言はれました。

私が幼稚園といふものに深い興味を有つたのは即ち此の時からのことです。私は教育學や保育法を専門に學んだのではありませんし、幼稚園問題には、もと／＼素人に過ぎません。しかし、斯うやつて親しく此の幼稚園へ出入して、先生に接して居りますと、少しはいろいろのことが分つて來るやうに思はれます。それも一々の小さいことは兎も角、幼稚園は幼稚園だといふ先生の根本の意味だけは可なり理解し得るやうに思ふのです。先生も亦何時でしたか、

「吾輩のガーデン主義は、園藝家の君に一番よく分るかも知れない」

と、笑ひながら言はれたことがありました。

此の先生といつしよに園庭に降りて斯うやつて働いて居ると、私の園藝も生きて來る様な氣がします。



## 編輯だより

○先づ以て會員讀者諸君の上に、よき新年をお祝ひ致します。お互様に今年も去年に増して、一層子供達の爲に盡し度いと思ひます。可愛い、子供達は斯うして一年々々大きくなつて私共の手から離れてゆく。さうすると又次へ／＼と可愛い、子供達が私共の手へ来る。さうして私共の心をいつ迄も若々しくして呉れる。不老不死の靈藥とかを遠い國に探しに行かないでも、私共のして居る仕事が即ち不老不死の靈藥ではありますまいか。

○本誌編輯にはいろ／＼心を用ゐて居りますが、尙ほお心づきの點は御注意を願ひます。教育の盛んな我國、殊に教育の雜誌も數多い中に、幼児の教育を専門に考へもし研究もする月刊雜誌として本誌の職責は輕からざるものと思ひます。皆さんの御協力によつて、本誌の此の職責を益々發輝させ度いと思ひます。従つて目を通して捨て、仕舞ふ様の慰み半分の讀者ではなく、何かと後の参考にもなる様なものにして度いと思ひます。少くも一冊々々行衛も知らない反古にはし度くない丈の親身な感じを持つて頂き度いと思ひます。恐ろしい自惚だとお笑ひなさいますが、まあ兎に角一年の終りに一卷づゝ合本に出来るやう毎號通しページにして置きました。

○本號から表紙及び第一頁の挿畫はラルソン蕭伯の作を用ゐました。丁度その緣故もあり、本號の大部分をラルソンの話に献けました。此の長篇を執筆して下さつた菅原學士に謝し、諸君の御精

讀を希望して置きます。

○會員諸君からの貴重なる御寄稿も、紙數の都合上御厚意に背いて居るものが澤山あります。深くお詫び致します。尙ほいろ／＼御寄稿を願ひますが、殊に御家庭または保育上の實際の御經驗に關するものを、とりわけ有り難く思ひます。かういふ子供に、かういふことを試みて成功したとか、或は又失敗したとか、さういふ類のお話は、直接お互の參考になつて、どんなに有益か知れません。何事にもですが、殊にお互の仕事には議論よりも實驗の方が貴いことであります。

○私共の始終切望して居りますことは、全國各地の保育會が、何とかもう少し互の連絡をとつて、幼児教育の内容もズ／＼改良し、又幼児教育の社會的氣運を大ならしむるにも力を協はせ度いといふことであります。亞米利加や獨逸でも、幼児教育の社會的趨勢は近來著しく大になつて参りつゝあります。斯ういふ協力の第一歩として、各地保育會の現況や御事業や、大なり小なり御報導下さいますれば本誌は喜んで掲載致します。之れはとりわけてお願ひ致して置きます。

○昨年十一月の鹿兒島新聞によりますと元鹿兒島幼稚園の伊藤コト子、志々目トヨ子、兩氏は卅年間勤續により、又芹澤イノ子は卅八年以來の精勤により、それ／＼謝恩の意を以て金圓の贈呈を受けられた由であります。その記事の標題の「保姆謝恩式」といふ字が、非常に私の目をひきました。遅れ馳せながら、此の慶はしき報知を茲に記さるを得ません。

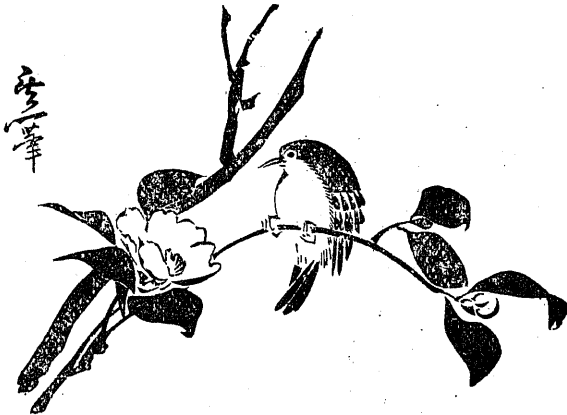
○滋賀縣彦根町東幼稚園の中澤登免子氏は毎年の御題に因らる株  
 育材料を考案せる、由であります、本年の松上の鶴に因める貼  
 紙細工と左の和歌に譜を添へて本會の和田氏へ送られました。

大宮のみ園の松のいやさかえ

しける枝に鶴をこもれる

會 告

- 一、本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます。  
 (イ) 庶務上の御手紙は、東京市小石川區久堅町七十四番地、フレール會宛。  
 (ロ) 會計事務は、東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、雨森劍宛。  
 (ハ) 本誌編輯上の御用務(原稿、廣告等)は東京府下代々木九二、倉橋三三宛。
- 二、本誌の購讀御希望の方は會費一ヶ月、金十錢の割合にて一ヶ月分をまとめて振替貯金へ御拂込下さい。(振替口座東京一七二六六番)  
 ●一冊郵税共金拾錢 ●六冊前金同六十錢  
 ●十二冊同一圓二十錢 ●郵券代用一割増



五二筆